

バウムガルテン『美学』訳註

—その2—

松 尾 大

目 次

凡 例	3
文献（補遺——その1——）	3
今回訳註をつけた部分について	4
訳 註	5

凡 例

「その1」の凡例に大体準ずるが、5. については次のように改めた。

5. 原文では強調部分はスモール・キャピタルで綴られている。これはゴシック体で表わした。

文 献（補遺——その1——）

Bergmann, E., *Die Begründung der deutschen Aesthetik durch A.G. Baumgarten und G. F. Meier mit einen Anhang G. F. Meiers unge-*

- druckte Briefe*. Leipzig, 1911. [Bergmann]
- Casula, M., "Baumgarten entre Leibniz et Wolff", *Archives de philosophie*, 42 (1979), 547-574. [Casula]
- Franke, U., *Kunst als Erkenntnis. Die Rolle der Sinnlichkeit in der Aesthetik des Alexander Gottlieb Baumgarten*. Wiesbaden, 1972. (= *Studia Leibnitiana*. Suppl. IX) [Franke³]
- Mahlow, D., *Die Kunst in der Aesthetik. Die Kunst bei G.W. Leibniz und in der Aesthetik A. G. Baumgartens*. Diss. Freiburg, 1955. [Mahlow]
- Pappalardo, R., "L'arte ed il Bello nell'estetica di Alessandro G. Baumgarten", *Siculorum Gymnasium*. 6 (1953), 132-135. [Pappalardo]
- Prieger, E., *Anregung und metaphysische Grundlage der Aesthetik von Alexander Gottlieb Baumgarten*. Berlin, 1875. [Prieger]
- Schmidt, H.-M., *Sinnlichkeit und Verstand. Zur philosophischen und poetologischen Begründung von Erfahrung und Urteil in der deutschen Aufklärung (Leibniz, Wolff, Gottsched, Bodmer und Breitinger, Baumgarten)*. (Theorie und Geschichte der Literatur und der schönen Künste 63) München, 1982. [Schmidt]
- Wessell, L. P., Jr., "Alexander Baumgarten's Contribution to the Development of Aesthetics", *JAAC* 30 (1972), 333-342. [Wessell]

今回訳註をつけた部分について

今回印刷に付されたのは、「梗概」のノテーションによれば、本論、I、I)、B)、a)、イ)、δ)、すなわち第5節から、本論、I、I)、B)、c)、ロ)、α)、c)、b)、1)、すなわち第19節の途中までである。

第5節 美的衝動

§ 78

恵まれた美的主体の一般的性格には (§ 27)、IV) 美的衝動 (心の美しい興奮、燃焼、激情、エクスタシス、狂気、エントゥーシアスモス、靈感) が要求される。その発生はこうである——かなり喚起された本性 (第2節) が、はや即興そのものに至っており (第3節)、更に又、天性を鋭敏にし、大いなる精神を養う学識に助けられ (第4節)、身体の位置⁽¹⁾と、先行する精神状態 (M. § 512、⁽²⁾ 516) とにとって好都合な諸状況に恵まれ (M. § 323)、美しく思惟する活動へ向けて、それまでは無気力であった下位認識能力、持前、力を既に緊張させている。その結果、これらの力は、多くの他の者が同じテーマをめぐる示すよりも大きなもの、あるいは、同じその人が、それほど高揚していない別の時に示すよりも大きなものとなり、現象している調和をもって生き生きと活動し、この生き生きと活動する諸力に匹敵するような結果、通常力よりも大きい結果、つまり、丁度、底辺が大きければ、それに比例して四角形も大きくなるように、それらの力に比例する結果⁽³⁾を生むまでに至る。その発生がこのように記述される精神の状態こそが、先程私が諸段階の多様性に応じてその様な名称を挙げた、あの激情そのものである。

(1) 身体の位置] (positus corporis)

§ 81、85 参照。

(2) M. § 512]

Ex positu corporis mei in hoc universo cognosci potest, cur haec obscurius, illa clarius, illa distinctius percipiam, § 306, 509. i.e. RE-RAESENTO PRO POSITV CORPORIS mei in hoc vniuerso.

「これを曖昧に、あれを明瞭に、あれを判明に私が知覚する理由は、この世界における私の身体の位置から理解しうる (§ 306, 509)、つまり、この世界における私の身体の位置に応じて私は表象する。」

(3) それらの力に比例する結果]

§ 457「原因と結果の均斉」: § 493「その出来事が、その諸力に厳密に釣り合うかどうか」参照。

§ 79

この熱情のあまり大きくない段階では、日常的な心の力より大きな結果も、それだけでは万人の目に明らかであるわけではない。しかしながら、もし真に激情があったとするならば、それと同じ結果を他の人が醒めたまままで得ようと試みると、

「誰でも同じことを希み、大いに努力し、同じことを企てて苦勞するが、無駄である」⁽¹⁾ (ホラーティウス)

ということになるであろう。さて、自分が自作の正当な評価者になる場合があるが、この場合に熱情の目印としては次のものがある。1) 例えば、自分の書いたものが、書いている間、及び着想の直ぐあとよりも、異種の仕事に何がしかの時間を使ったあとの方が自分の気に入る場合。2) かなり大きな迅速さがある場合。これは、物理的なものにおいても、生きた力の目印である。

(1) ホラーティウス『詩学』240—242。

§ 80

心理学者らには明白なことであるが、このような衝動においては精神は全体としてその力を緊張させている。しかし特に緊張するのは下位の諸能

力である。このとき、精神のいわば根底全体 (M. § 511⁽¹⁾) が一層高揚し、何か一層大きな靈感を受け、われわれの気づかなかったようなこと、経験しなかったようなこと、他人は無論のこと、われわれ自身にも予見できなかったようなことをたやすく与えてくれることになる。この精神の根底というものが多くの人々に、否、哲学者にすらいまだ知られていなかったころは、§ 78で私の記述したその異常な結果は、起動者たる神々に帰せられたのであり、それはルクレーティウスの次の言葉が示している：

「その原因についての無知は、万事を神々の支配に帰し、神々の王国を認めるよう強いる。」⁽²⁾

「その働きの原因をいかなる方法でも知りえぬ物事は、神の意志でなされると考える。」⁽³⁾

(1) M. § 511]

Sunt in anima perceptiones obscurae, § 510. Harum complexus FVNDVS ANIMAE dicitur.

「魂の中には曖昧な知覚がある (§ 510)。それらの複合体は魂の根底と言われる。」

(2) ルクレーティウス VI, 54—55。

(3) 同 上 I, 153—154。

§ 81

このような種類の興奮には、それを追いかけたり、或いは少なくとも差し出されたときにそれをつかまねばならぬ好機が、身体的位置に応じて⁽¹⁾いくつもある。それを検討しよう。かかる好機は「今を逃がせば、もう二度とこない」⁽²⁾ものである。それには次のものがある。1) 身体の動き、運動、特に幾分憂鬱質の者のそれ、例えば、かなり早い乗馬によるもの (§ 46)。ヒッポクレーネーの泉⁽³⁾を開くのがペガサスであるのも、これほ

ど多くの歌が旅程で書かれたのもこの理由による。「精神が身体の運動、動きで喚起されることは驚くべきことである」(プリーニウス、第1巻、第6書簡)。

- (1) 身体の位置に応じて]

§ 78、85 参照。

- (2) ペトロニーウス『サテュリコン』44。

- (3) ヒッポクレネーの泉]

ヘリコン山近くの泉で、ムーサに縁が深い。ペガサスの蹄の一撃で生まれたという伝説がある。

§ 82

2) 弾みとは、麗しく思惟するための衝動である。この精神状態においては、本性上予見、予知が一層容易である (M. § 602)。これらは、洗練された思惟内容に特に必要な諸力であるが、日常は最も脆弱なものである (§ 39, M. § 597)。そこで、健全な身体における健全な精神 (E. § 254) は、他の人の麗しい天性によって、その模倣へと傾く (§ 56, 44)。この方法によって、ポイボス・アポルローンに憑かれた人は喚起されたのであった。こうして又、この世の生命の危機的变化の際に、最大の重要性を持つ大きな変革が迫りつつあるときが、

「神託を問い求めるべき時であろう。おお、神が、そこに神が！」⁽¹⁾

(§ 80)

- (1) ウェルギリウス『アエネーイス』VI, 45—46。アポルローンの神託を告げるシビュラの言葉である。

§ 83

3) 歴史(クリオー)、物語、特に英雄伝説(カリオペー)、或いは、悲しい出来事(メルポメネー)、楽しい出来事(ターリア)、音楽(テルプシコレ)、舞踊(エラト)、絵画(ポリュヒュムニア)、及びいかなる型のであれ自由学芸は、模範に近づこうとする気を起こさせる。また、われわれの外に位置する自然物ですら、かわいらしく戯れたり⁽¹⁾、あるいは、例えば太陽など、宇宙の一層大きな光景によって驚愕させたりする(ウラニア)(§ 82)。このようにしてかきたてられた者が「ムーサに憑かれた者」(ムーソレープトス)、および「ムーサにうたれた者」(ムーソパタクトス)である。それ故、ムーサたちは、優美の女神(グラーティア)たちに劣らず、互いに結びついているのであり、切り離してはならない。例えば、アレクサンドロス大王や、アウグストゥスや、ルイ14世の時代には、一つの学芸が栄えれば、他の諸学芸も栄えていたのである。

(1) かわいらしく戯れたり]

ホラーティウス『書簡詩』II. I. 148「かわいらしく戯れた」(*lusit amabiliter*)に準拠。

§ 84

4) かなり多くの閑暇(E. § 267, M. § 638)。それは、心が心配から解放されて、労苦、仕事の重荷をおろし、心地よい(§ 83)散歩道を気ままに歩きつつ(§ 81)、隠れ場で、靈感に対して晴れやかに開いているときである(§ 80)。ヘリコーン山で羊を飼い、パルナッソス山で眠るというのがおそらくそのことである。「おお、甘き立派な閑暇よ、殆ど全ての仕事より美しきものよ! おお、海よ、岸边よ、真にして秘められたムー

セイオンよ！ 何と多くを汝らは見出すことか！ 何と多くを語ることか！」⁽¹⁾（プリーニウス、第1巻9）

（1） プリーニウス『博物誌』I. 9. 6。

§ 85

5) 美しく思惟しようとする人、とりわけ、主題とはかなり異質の感覚表象にとらえられている人、つまり水を飲む人⁽¹⁾に、§ 39で記述したような状態が要求されるならば、すぐれた飲料を適宜飲むことが、身体の位置 (§ 78) にとっては好ましいであろう。それによって感覚表象——例えば、煩わしいそれ——は、かなりの程度弱まり、必要な想像表象と予見——例えば、快活なそれ——が、それだけ一層明瞭になりうるであろう (M. § 554)。かなり多くの泉にこの作用がある、と自然誌家らは語っている。アガニッペ⁽²⁾の泉水には、このような力があつたと考えるがよい。

（1） 水を飲む人] (aquae potor)

ホラーティウス『書簡詩』I. 19. 3にある言葉で、酒を飲む人に対し、素面でいる人を指す。次の§ 86をも参照のこと。

（2） アガニッペ] (Aganippe)

ボイオティアのヘリコーン山にある、ムーサの聖泉で、詩的靈感を与えると
いう。

§ 86

ホラーティウスと判断を同じくする人々は、そのような泉水よりも葡萄酒を優位に置くであろう：

「水を飲む者に書かれるうたは長く喜ばせることも、生きのびることも

できない。」⁽¹⁾「その液体は、歌に声を合わせることを教え (§ 83)、知らぬまに、定かなるリズムで手足が動くようにした。バッコスはまた、農夫の大いなる労働に疲れた胸を、悲しみより解放した (§ 84, 52)。バッコスはまた、悲惨な人間どもに安息をもたらす。硬い足枷にうたれて、脚は音を立てているけれども (§ 85)」⁽²⁾。(ティプルス)

それ故、バッコスもまた美的興奮、燃焼の発動者である (§ 80)。もっとも、ホラーティウス (『頌歌』第2巻19、第3巻25) の虚構の陶醉を本気にし、現実であるかのように模倣しようとして、

「体を広げ、生命なくふるえつつ地に横たわる」⁽³⁾ (ウィルギリウス)

という神託を吐き出すまで、ずっとアポローンとムーサにお供えをし、バッコスの気をひこうとする者は、見苦しい考え違いをしているのだけでも。

(1) ホラーティウス『書簡詩』I. 19. 2—3。

(2) ティプルス I. 7. 37—42。

(3) ウェルギリウス『アエネーイス』V. 481。

§ 87

或る女性と対座して、彼女が笑うのを何度も眺め、且つ聴くところの⁽¹⁾ 美的主体には、新たな弾みがある。ああ、それは彼から全ての感性を奪ってしまふ。つまり、自分のレスビア⁽²⁾を見るや否や、彼らにはもはや何も残っていない。

「舌はこわばり、妙なる炎が四肢のもとにすべり込み、耳は自分の音で鳴き響き、目は二重の闇に閉ざされる。」⁽³⁾ (カトゥルス)

これに対し、小径を往来しても目ざす女性が不在で (§ 81)、訪れても扉は閉じられ、窓にひとけがないときには、彼らは突然都を逃れて山々、

森にはいり (§ 84)、そこで、自然の驚異たる自分の恋人が甘く笑うのを遥かに眺め、甘く語るのを遥かに聞き、創作し、執筆し、歌い、琴を弾じ、絵を描く。この心痛の代弁者たる森と、理解者たる星々⁽⁴⁾は (§ 83)、この者らが、知らず知らずのうちに、最高の快を伴って予見していることが、以前は予想もつかなかったことであることを知っている。確かに、ウェヌスとアモルが、今論じつある (§ 78) 興奮を作り出す者と見なされるのは、この者らの故にであって、

「猥褻で恥知らずなことをわめく」⁽⁵⁾

娼婦の競売人らの故にではないのである (§ 54, 59)。

(1) 或る女性と……ところの]

引用の表示はないが、カトウルス 51, 3—5の語句を多少変更しただけで用いたもの。

(2) レスピア]

カトウルスの愛人クローディア。

(3) カトウルス 51, 9—12。

(4) この心痛の……星々]

ウェルギリウス『アエネーイス』IV. 608: 「この心痛の代弁者にして理解者たるユーノー」をもじっている。

(5) ホラーティウス『詩学』247。

§ 88

おそらくは神々による靈感よりも (§ 80) 現実的な弾みは、8)

「翼を切りとられ、墜落し、父祖のかまども所有地も失なった者を、向こう見ずな貧困が作詩するよう強制した」⁽¹⁾

場合である。例えばホラーティウスがそれで、自分では戯れに語っているとしているのだが、多くの人々がそれを全く本当のことであると真面目に

とっているのは正しいのである：

「欠けていてはならぬものは持っているのだから、眠るよりも詩を書く方がよいなどと考えたとしたら、どんな毒人参も私の血を浄めることはできぬことになる」⁽²⁾。

(1) ホラーティウス『書簡詩』Ⅱ. 2. 50—52。

(2) 同上。Ⅱ. 2. 52—54。

§ 89

9) 憤激。

「激情が、固有の短長格でアルキロコスを武装させた。」⁽¹⁾ (ホラーティウス)

ホラーティウスも、この弾みを自分に予感している (『談論集』第2巻1、40—60)。ユウェナリスは、冒頭から直ちにそれを呼吸している。

「私はいつも聞き役にすぎぬのか。しわがれ声のコルドウスの『テーセウス譜』にこれほど多く悩まされても、やり返せぬのか」⁽²⁾

「諷刺詩を書かないのは、至難のわざである。誰が不正の都を我慢し、不動心をもって自制しえようか……」⁽³⁾

「どう述べようか、肝臓がどれほどの怒りに干上って燃えているかを……」⁽⁴⁾

「これはホラーティウス風の夜なべ仕事にふさわしいと考えてはならないか。これを弾劾してはならないのか」⁽⁵⁾

「たとえ本性が拒もうとも、憤激は、いかなる詩をも私のようなものにする。」⁽⁶⁾

他の部分でも彼はこのように進んでいく。同じ泉から湧き出たものには、デーモステネースとキケローの『ピリッピカ』、キケローの『ウェッレー

ス弾劾』、『カティリーナ弾劾』、オウィディウスの『イービス』等がある。

- (1) ホラーティウス『詩学』79。
- (2) ユウェナリス I.1—2。この詩は、神話を題材とする詩の因襲性を攻撃する諷刺詩である。
- (3) 同 上 I.30—31。
- (4) 同 上 I.45。
- (5) 同 上 I.51—52。
- (6) 同 上 I.79—80。

§ 90

この憤激にかなり近いのは 10) 擲楡である (M. § 684)。けれども、ホラーティウスによれば、これは憤激よりも友好的であり、それほど辛辣でなく、苦みよりも、むしろぴりっとした味を持つものである。§ 52で述べた即興、及び群れ集まる兵士らの戦勝の戦車はここから生まれる。古の「喜劇が大いに賞讃されたとはいえ、放埒さは頹落して、欠点と、法で支配されるに値する暴力とになってしまった」⁽¹⁾ (ホラーティウス) のもそれによる。アリストパネス、ルキアノスの殆ど全て、そしてマルティアーリスの多くのエピグラマもこの擲楡から生まれたのである。

- (1) ホラーティウス『詩学』281—283。

§ 91

11) 精神の全ての激動。但し、美しく思惟されるべきもののみでなく、美しく言表されるべきものについても語る場合、直観が象徴的な半認識を抑圧する⁽¹⁾ほど大きくはないもの。12) 運命の全ての転変、精神を碎かぬ

限りでの不運と、精神を弱め、分裂させぬ限りでの幸運 (§ 82)。けれども、われわれは喜劇作家よりも悲劇作家に一層多くの洗練を負っている。

(1) 直観が象徴的な半認識を抑圧する]

Met. 620 参照。

Si signum & signatum percipiendo coniungitur, & maior est signi, quam signati perceptio, COGNITIO talis SYMBOLICA dicitur, si maior signati repraesentatio, quam signi, COGNITIO erit INTUITIVA (intuitus).

「しるしと指示対象とが知覚によって結合され、指示対象の知覚よりもしるしの知覚の方が大きいならば、そのような認識は象徴的と呼ばれる。もし、しるしの知覚よりも指示対象の知覚の方が大きいならば、直観的認識（直観）ということになる。」

§ 92

すぐに一杯になるこのカタログの中で、陣列のしんがりをつとめるのは若さであろう。或いはむしろ、想像力が目立って衰えるほどの成熟^{マター}には心がいまだ達していない年代といった方がよからう。つまり、下位認識の諸能力が最初に現象者となるのは、この若さにおいてなのであるが、それらは成長したのと同じ順序で衰退するのが自然なのである。従って、美しく思惟することの、より先なる素材を供給する2つのもの、すなわち鋭敏さと想像力 (§ 30、31) とがはや弱まりはじめると、美しく思惟することの主要な好機は過ぎ去ったと判断される。従ってホラーティウスは、

「最後になって誤り、笑いの種となり、喘ぐということのないよう、年老いた馬は早目に健全な判断によって解き放て」⁽¹⁾

という規則を立てているだけではなく、十分に審査され、既に現役を引退し、⁽²⁾

「詩も他の娯楽も脇に置きつつある」⁽³⁾

自分は、昔の粗野な学校に閉じ込められたくないと言っている。

(1) ホラーティウス『書簡詩』I.1.8—9。

(2) 既に現役を引退し]

原語の“donatus iam rude”は、文字通りには、退役に際して名誉の印である剣を贈られることを意味する。

(3) ホラーティウス『書簡詩』I.1.10。

§ 93

次のことは自明である。1) これらの弾みは、幸福な生の一層強い法則に逆って用いてはならない。2) それらの弾みは、§ 78で探求された結果を生まぬ愚かな本性、鈍い本性でも豊かに持てるほど孤立した原因ではない。

§ 94

相当大きな美しい思念においては、全体の美の方が、どこか一部分の美よりも難しく、事柄と配列の美の方が表示形式の美よりも難しい (§ 18—20)。だから、前者を最もよく形成するためには、作品が熟成してくるまで、心の美的衝動とその弾みとを用い続けねばならない (§ 78—92)。

§ 95

熱狂が持続し、全体及び主要な部分を美しく据えるよう精神が一体となって志向する間は、たとえかなり恵まれた天性であっても、ささいな部分のささいな洗練を整え作ることからは離れていることが望ましい (M. § 529⁽¹⁾)。その目的は、次のような彫刻師に似たものにならぬことにある。

「爪をかたちづくり、柔らかい髪を銅で模倣もするが、作品全体を形成することはできないので、作品の全体では哀れなものになってしまう。私がもし何か詩を作ろうと欲するならば、今述べたような者でありたくはない。丁度、黒い眼と黒い髪那点では見た目もよいが、曲がった鼻をもって生きるのはいやなように。」⁽²⁾ (ホラーティウス)

(1) M. § 529]

Quod aliis clarius percipio ATTENDO; quod aliis obscurius, ABSTRAHO AB EO. Ergo habeo facultatem attendendi & abstrahendi, §. 216. sed finitas, §. 354. hinc in certo tantum, non maximo gradu vtrisque, §. 248. Quo plus quantitati finitae demitur, hoc minus est residuum. Ergo quo magis attendo vni rei, hoc minus possum attendere aliis: ergo perceptio fortior attentionem admodum occupans obscurat debiliorem, seu facit a debiliori abstrahere, §528, 515.

「他のものより明瞭に知覚するものに、私は注目する。他のものより曖昧に知覚するものを、私は捨象する。それ故、私は注目と捨象の能力を持っている (§ 216)。しかし、これらは有限であり (§ 354)、それ故、いずれも一定程度のものにすぎず、最大程度のものではない (§ 248)。有限量から奪われれば奪われるほど、残りは少なくなる。それ故、1つの事物に注目すればするほど、他のものに注目しなくなる。それ故、注目をひとり占めにする強い知覚は、弱い知覚を曖昧にしたり、捨象したりする」 (§ 528, 515)。

(2) ホラーティウス『詩学』32—37。

第6節 美的彫琢

§ 96

美しく思惟されるべきことの中には、例えば、本当に親密な会話や書簡のように、あとで手を入れるわけにはいかず、あたかも準備なしであるか

のように言表されねばならぬものがある。この場合、最も大事なことが輝き、主要な事柄が美しいときには、矯正が占める場はないのであるから、もし僅かな欠点、

「軽率が撒き散らしたり人間の本性によってうっかり見落とされた欠点に腹を立てる」⁽¹⁾ (§ 95)

としたら、私はあまり公正な判定者ではないことになるう。

(1) ホラーティウス『詩学』352—353。

§ 97

美しく思惟されたもののうちには、なしうる限りの全ての美点をそれにつけ加えないうちは言表すべきでないものもある。つまりこれは、あとで手を入れることを許すものである。この場合、他の条件が等しいならば、部分的な美は全て、全体の美を増幅するのであるから (M. § 185)、V) **彫琢への努力** (推敲の労と手間⁽¹⁾) が、実り豊かな美的主体の性格を仕上げる。それは、美しく形成された作品に注意を向け、その小さな部分の小さな完全性をできる限り増幅し、多少現象者となっても全体を損うまでには至らぬ不完全性を取り除く持前である (§ 27)。美しい思惟はすべて、絵画と同じであろう。

「暗闇を好むものもあれば (§ 96)、判定者の鋭い批評を恐れず、光のもとで見られることを望むものもある (§ 97)。一度で喜ばせたものも (§ 96)、十度繰り返されてから喜ばせたものもある (§ 97)。」⁽²⁾ (ホラーティウス)

(1) 推敲の労と手間 [limae labor et mora]

ホラーティウス『詩学』291にある言い回し。

(2) ホラーティウス『詩学』363—365。

§ 98

部分の彫琢は、全体の美しい仕上げよりも容易である (§ 94, 97) から、作者が

「愚かにも研磨を不名誉なものと考えることもなく、恐れもせず」⁽¹⁾
(ホラーティウス)、

或いは又、推敲の労と手間を厭わないならば (M. § 527)、心の一層大きな衝動が (§ 78) はやすぎ去って、

「狂気が去り、狂える口も鎮まるや否や」⁽²⁾ (ウィルギリウス)、
はや悟性と理性とが一層判明に輝き出し、悟性的判断力 (§ 38) が、技術的美学の諸規則へ、一つ一つのものをあてはめることにより (第4節)、
彫琢はなしとげられうるであろう。

(1) ホラーティウス『書簡詩』II. 1. 167。但し、文脈上の理由により、原文に多少変更が加えられている。

(2) ウェルギリウス『アエネーイス』VI. 102。

§ 99

技術的美学は、美しい思惟内容、又は多少醜い思惟内容についての意識を嚮導するが、この意識には、所謂先行する意識 (第4節)、随伴する意識 (第5節) のみならず、結果として後続する意識 (§ 98) もまた含まれる。この、結果として後続する意識は、いまだ

「羊毛製の紙を内々にしまって、公刊しなかったものをうちすてること
ができる」⁽¹⁾

ときには、決して無用なものではない。

(1) ホラーティウス『詩学』389—390。

§ 100

もし、よく推敲をしようと思えばできたのに (§ 97)、実行することを忘れた作者がいた場合、鋭敏な人々はそれに対してかなりの憤りを覚えるのが常である。その理由は、大きなことができた作家は、小さなことに対しても十分な力を持っていた筈なのに (§ 98)、彼の観客をそれほど重く見なかったということが、これら鋭敏な人々にはわかるということである。そして観客は、作者を軽視することによって、自分たちの正当な権利が軽視されたことの償いをさせるのである。こうして、一見些事にすぎぬものが、

「ひとたび嘲笑され不運に見舞われるときには、重大な災に引き込むことになるう」。⁽¹⁾

(1) ホラーティウス『詩学』452。

§ 101

ローマ人が著作の点でギリシア人に及ばぬ唯一の理由は、今問題となっている彫琢の軽視である、とホラーティウスは判断している (『詩学』291)。特にルーキウスにおける彫琢の軽視を、ホラーティウスは『談論集』I.10で非難している。最終的の推敲がいかに必要であるかを教えているのは、絵ではアペルレース、『アエネーイス』を炎で燃やせと遺言したウィルギリウス、推敲の軽視を、追放という不幸のみのせいにしたオウィディ

ウス（『黒海からの書簡』Ⅰ.ep. V. 17）である。このオウィディウスは、ローマでは自分が一度ならず訂正を行なっていたことを思い出し（同、Ⅱ.ep. VI⁽¹⁾）、自作を「入念な配慮をもって推敲する」ことを、弁論家の場合にすら賞め讃えている（同、Ⅳ.ep. VI⁽²⁾）。これはキケローと考えを等しくする。キケローの描く「弁論家には小さなこと」すら「おろそかに取り扱う」⁽³⁾ことは許されず、「推敲された語り方」⁽⁴⁾が範例と規則をもって勧められているのである。

- （1） オウィディウス『黒海からの書簡』Ⅱ. 4. 17—18：「そして私の書が友人の鑑で磨かれているように、一度ならず君の忠告に従って推敲がなされた。」
- （2） 同上 Ⅳ. 6. 37—38：「これは、きわめて入念な配慮を以て君に推敲されるので、それは君の身体の本姓でないと皆が言う程である。」
- （3） キケロー『弁論家』78。但し、ここで「小さなこと」と訳した原語の 'minuta' は、キケローの原文脈においては「リズムに無頓着な」を意味する。これは三文体の一つである平淡体の徴表の一つであり、従って、かなり限定された、術語の意味で用いられている。これに対しバウムガルテンの文脈においては、一層広義に用いられている。
- （4） キケロー『プルートの書』93。この言い方は、キケローにおいては、三文体の一つ平淡体を指す。従って様式概念に関わる。これに対しバウムガルテンにおいては、すぐれた文体の特徴として、価値概念に関わる。

§ 102

オウィディウスは次のように考えている：

「けれども私は推敲しない。それは書くことよりも大変だから。それに又、病んだ心は硬いことを耐ええない。私は一層辛辣に推敲を行ない、一語一語、裁判へ召喚せねばならぬのか」⁽¹⁾。

もしこれと同じように考える者がいたならば、退屈で力の使い道がないとこぼす一方で、力が足りないといって、より多くの力を要求する点で混乱

している。確かに前者、すなわち退屈さが推敲につきものであることは私も認めよう。しかし後者、すなわち力はそうでない。それにまた、君の作を認めるであろう人々に対しては

「最大の畏怖を持ってしかるべき」⁽²⁾

なのであるから (§ 100)、推敲がどんなに退屈であろうと耐え忍ばねばならない。

(1) オウィディウス『黒海からの書簡』I. 5. 17—20。

(2) ユウェナリス『諷刺詩』XIV. 47: 「君は子供に対しては、最大の畏怖を持ってしかるべきである。」

§ 103

他人に自分の短所を直してもらうのに慣れっこになっている子供がいる。また、自ら進んでそうなっている大人もいる。そして、直してくれる人が自分にはないと、

「人は誰にも特有の誤りがつきものであるけれども、かばんのうち、背中になっている部分は見えない」⁽¹⁾

と嘆く。確かに、古代人らのなした人前での朗読⁽²⁾は、それが諂いによって駄目にされぬ限り、健全な助言に通ずるものであり、いまだ9年抑えている間に⁽³⁾、われわれの作を判定するに際しての意見を求められて、

「アリスタルコス⁽⁴⁾となる」⁽⁵⁾

ような、見識と思慮のある男⁽⁶⁾がいないのを嘆くのも当然であることは私も認めよう。けれども、このような検査官^{ケンゾウ}に要求してよいのは、せいぜい「こことここを直してごらん下さい」⁽⁷⁾と言ってもらったり、

「荒削りのものには、ペンを横に走らせてしるしをつけ」⁽⁸⁾

でもらうことだけである。一層よいものを自分で供給するためには、人の

意見を求めるのは正当でない。誰にでも自分の思惟方法があり、何人かの人には、その人だけに固有の思惟方法がある。もし、私と、私の批評を求めて朗読する人とが選ばれる際、二人の能力がおおよそ等しいならば、冷静な心で (§ 98) 他人の思惟の間に私の思惟を挿入するよりも、私の思惟方法で作品全体を完成させる方が、私にはきっと容易であろう (§ 78)。前者の場合、私の思惟は、作者たる私の一貫した衝動から溢れ出たものの中にある方がよいのに、私と私の思惟方法とによって生み出されたのではない別の思惟に寄与し、ぴったりと密着する⁽⁹⁾ようにせねばならぬからである。

「もし、欠点を直すより固執する方を欲するなら、私はもう何の言葉も空しい努力も与えまい。君はひとりよがり自分と自分のものとを愛することになるう」⁽¹⁰⁾ (ホラーティウス)。

(1) カトゥルス XXII. 20—21。

(2) 古代人らのなした人前で朗読]

古代ローマ時代には、公刊前に識者の前で自作の詩を朗読し、批評を仰ぐことがあった。ホラーティウス『詩学』438参照。

(3) いまだ9年抑えている間に]

ホラーティウス『詩学』386—388参照：「しかし、もし何かを書く日があるならば、批評家マエキウスの、そして父祖とわれわれの批評を求め、内々に羊皮紙をおいて、9年抑えるようにせよ。」

(4) アリタルコス]

厳格な批評家の範例。

(5) ホラーティウス『詩学』450。

(6) 見識と思慮のある男] (vir bonus et prudens)

ホラーティウス『詩学』445にある言葉。

(7) ホラーティウス『詩学』438—439。

(8) 同上 446—447。

(9) 寄与し、ぴったりと密着する]

ホラーティウス『詩学』195にある言い方。

- (10) ホラーティウス『詩学』442—444。ただし原文の時制と人称が多少変更されている。

第7節 いくつかの注意

§ 104

自然的あり方の思惟とは、1) 思惟主体たる精神の自然的能力、2) 対象の本性、3) 読者や聴衆、すなわち、その人々に対して、又、その人々の効用や喜びの為に思惟を企て、着手すべきであるところの人々の本性に釣り合ったこと、短く言えば、これらの本性を模倣していることが語られる場合をいう⁽¹⁾。美しく思惟しようとする精神には、自然的あり方の思惟が必要であり、その結果、美しく思惟しようとする精神の本性と、多くの対象の本性とがいまだよく認識されていない段階では、「自然（本性）を模倣せよ」という、たった1つの法則によって、麗しき思惟の技術体系の全体がとらえられるように思われるほどであった。

(1) 自然的あり方の思惟とは……場合をいう。]

『講義録』によれば、パウムガルテンは、アリストテレスの自然模倣の考えでは、ここで述べられた3者がいまだ区別されていないと考えていたようである。確かに、「ミーメーシス」が語られる文脈ではそうかもしれない。しかし乍ら、アリストテレスの『弁論術』III.7 (140 a 10—11) においては、「適合」に、1) 語り手、2) 聞き手、3) 主題それぞれと言葉との適合という3種が既に区別されている。このことについては、松尾大「弁論家とパトス——キケローの decorum 論の一側面——」(東京大学美学芸術学研究室編『美学史論叢』、勁草出版サービスセンター、1983) pp. 83—84 参照。

§ 105

それ故、美しく思惟しようとする者の注意すべき点としては、次のようなものがある。1) 第2節で私の記述した本性を、全くではないにせよ、かなり欠いている人は、麗しい本性の誉れをめざさぬようにせよ。それは**本性に反すること**であり、俗に言う「琴にろば」⁽¹⁾のようなものだからである。2) 本性一般は十分に持っている者が、特殊的性格と、本性の特有な、所謂 ^{インフレクシオ} 湾曲 とを要求することを自分で思惟する場合には、自分の特殊的性格にこれらの自然の才覚が与えられているかを予め見ないうちは、それを企てぬようにせよ。さもないと、**本性を越えて**思惟しようとする者は、丁度あの

「麗しく、皮肉好きで雅びな人」⁽²⁾

スフェーヌスのようになろう。このスフェーヌスの詩を読むと、

「お洒落で雅びなあのスフェーヌスが、今度は山羊飼いか穴掘人夫にしかみえなくなる。それほど武骨になり、変貌してしまう」⁽³⁾ (カトゥルス)。

いずれの思惟のあり方も、ミネルウァの意志に反して企てられたものである。

「ミネルウァの意志に反しては、君は何一つ語ることも作ることもないだろう」⁽⁴⁾ (ホラーティウス)。

キケロー『義務について』第1巻 110。

(1) 「琴にろば」 (asinus ad lyram)

既にギリシアに「ろばがリュラを」という諺がある (ゲリウス III. 16, 13 参照)。ラテン世界では、パエドルスの Appendix 14 が 'Asinus ad Lyram' という題を持っている。

(2) カトゥルス XXII. 2.

(3) 同上 XXII. 9—11. この詩の大意は、スフェーヌスが社交においては

洗練されているのに、ひとたび詩に手をそめるや否や全く衰れなことになる、
というもの。

(4) ホラーティウス『詩学』385。

§ 106

自然的あり方の思惟をきわめて正しく追求した者 (§ 104) は、ユーノー
ーと思って雲を抱く⁽¹⁾ように、「肥え太ったミネルウァ」⁽²⁾を、

「田舎の、風変わりな学者として」⁽³⁾

抱くことがあってはならない。もし何かあなどりがたい本性 (第2節) が
輝き出ることがあると、若書きというよりは習作を、全ての点でもう完成
されていると考えたり (第3節)、あるいは、まだ粗野な天性に一生満足
して、自然的であるといって賞める者は、**粗野なあり方の思惟**を追求する
ことになろう。しばしば相当に平凡である彼の本性には、何の学識も、何
の技術も付け加わらないであろう (第4節)。

(1) ユーノーと思って雲を抱く]

イクシーオーンがヘーラーを犯そうとしたとき、ゼウスが雲でヘーラーの似
像をつくって、これを欺いたことに因む。

(2) 肥え太ったミネルウァ]

鈍い本性を言う。ホラーティウス『諷刺詩』II.2.3.: キケロー『ラエリウ
ス』19参照。

(2) ホラーティウス『諷刺詩』II.2.3。

§ 107

粗野なあり方の思惟が相当に醜い現象となる仕方には2通りある (§ 14)。

1) 無知 (無学、無教育) なあり方の思惟によるもの。これは、美しい教

養の段階のうちで、凡人を越えた知識をめざす全ての人にわれわれが一般に要求する程度のものに達するのにすら、かなり苦勞する場合、又は、特に或ることについて或る人が自分の思惟を麗しいものとして言表しようとした際、その対象の本性を、並の学識さえあれば、もっとしっかりと知ることができたであろうのに、その対象について無知であることが明らかな場合である (§ 104)。

「焼いたエジプト豆や木の実を買う者」⁽¹⁾、
つまり教養のない者は、誰もが何でも知っているというわけにはいかないのである (§ 66, 67)。

(1) ホラーティウス『詩学』249。

§ 108

粗野なあり方の思惟には、2) 鈍いあり方の思惟がある。それは一般には、優美に思惟することの正しく基礎づけられた諸規則に対する無知や無視、又、特殊には、§ 106、68、69でその型が述べられた特殊な技術に対する無知や無視を、何の優美さも含まないような破格 (§ 25, 72) によって示すものである。

§ 109

この2通りの誤り (§ 107, 108) にはそれぞれ、それらとは逆の欠点に対応している。

「1つの誤ちを回避しても」、
自然を見事に補完する真の (第4節)

「技術を欠くと、かえって別の欠点に通じてしまう」⁽¹⁾。

この逆の欠点のうち第1のものは、**術学的で、学校的なあり方の思惟⁽²⁾**である。それは、美しい思惟のあり方を要求するもの、そして、行儀のよい人々の間で優美に生きる習慣をいわば第2の本性として模倣、追求せねばならぬもの (§ 104) において、専門的教養が多く密集しすぎて、美たることをやめてしまったり (§ 15)、あるいは、年少者や或る種の初等教師のところでのみ教養の外観を呈するものが集められる場合である。

(1) ホラーティウス『詩学』31。

(2) 術学的で、……思惟]

ロンギーノス 3.3ff. 参照。

§ 110

第2は、わざとらしい、不自然なあり方の思惟である。これは、技術によって本性を補完し損なったもので、クィーンティリアーヌスの説くところによれば、「技術は、繊細さを愛好しすぎると」、思念の優美さ「のうちにある真正なものを全て打ち砕き、粉碎してしまう」⁽¹⁾。自然的あり方の思惟を滅ぼすこの病が広がるのは、1) 見せかけのではない、自然的な美しさだけで十分であったのに、何らかの技術の色どりが無用の補助に呼ばれ、かえって害を与える場合、2) あまり才能に恵まれない者がいて、人目を欺く技術の悪しき規則に陥ってしまった場合、3) よき技術の規則が適用され、場所を占めているが、その仕方が不適切な場合 (§ 105, E. § 336) である。

(1) クィーンティリアーヌス I. pr. 24。

§ 111

自然的なあり方の思惟を正しく追求してはいるが (§ 104)、本性の日常的状态や、確かに何らかの学識によって促進されたとはいえ (第4節)、無力で冷えた能力を誤って本性であると思い込んでいる人々もいる。いかなる衝動も、いかなる燃焼もなしに生きている人々に、**生気のない** (冷たい、眠たげな、不活発な) **あり方の思惟**が生ずるのは、この原因からである。これは第5節で述べられたのと逆の場合である。

§ 112

「鈍感な者らは、一つの欠点を避けようとして、逆の欠点へ向かっていく」⁽¹⁾。

そして貧しい生気の無さを用心して避けようとする人々は、パレンテュルソス⁽²⁾や**放埒なあり方の思惟**に陥る。それは、悟性と理性による制御だけでなく、かなり鋭い趣味による制御をもはらいのけ、何らの理由もなく現象者となり、おおよそどのくらいで十分であるか考えもせず、正気を失った頭の性状のみを模倣しているような大きな狂気を示すことになるだろう (§ 104)。このような狂人を笑うことで、ホラーティウスは彼の『詩学』を結んでいる：

「確かに彼は発狂し、あたかも、正面にある檻の鉄格子を砕く力のある熊のように、知なき者、知ある者を追い払う」。

(1) ホラーティウス『諷刺詩』I.2.24。

(2) パレンテュルソス] (parenthyrsus)

ギリシア語で「衒った文体」を意味する。

§ 113

怠惰な哲学者や医者らは、まるでそれが機械仕掛けの神でもあるかの
ように、自然を自己の怠惰の口実にすることがある。丁度それと同様、お
よそ粗野で無知で鈍いものでさえなければ、それを自然的なあり方の思惟
と呼ぶ者らがいる (§ 106—108)。けれども、これは乱雑で不完全なあり
方になることもある。それは、第5節で述べた心の衝動そのものにおいて、
十分な時間をかけずに急ぎすぎ、最初に生じたものを全て最上のものとし
て選びとる場合や、かなり速く生み出したものを、あとになって更訂のた
めに見直すことを全くしなかったり、取り除かなければならない欠点があ
っても、自分の子供の本性を壊すのを恐れる親の甘やかしによって、どこ
にも手を触れなかったりする場合である。この悪しき思惟のあり方に対し
ては、第6節で述べたような推敲されたあり方の思惟をもって警戒せねば
ならない。

§ 114

そうはいっても、磨くというよりも、むしろ削り取るような推敲、すな
わち過度の彫琢は勧められない。これには、次の3つの場合がある。1)
本性から生まれる成果は、即席であり、即興的であることが要求されるの
に、努力と手間をそれにつけすぎて、いかにも夜なべ仕事くさいものにな
り、即席のものに特有の、美しい真実らしさを持たなくなってしまう場合
(§ 96)、2) 切角かなり大きなことに適した衝動に溢れているのに、その
衝動を細部に滞留させたり、分散させたりしてしまう場合 (§ 95の逆)、
3) 自作を見直すときに、「いわば風のように、心の全ての動きが」⁽¹⁾ 思惟
する者の「熱を冷まし、全ての炎が消えてしまい」、或る種の力をともな
ってはじめは溢れていたものが「萎んでしまい」、或るものが落とされ、

別のものが一層きらびやかなものとして付け加えられることによって、美しく思惟する者の全ての興奮といわば「炎」とが一気に「消される」場合である (§ 111)。このような推敲は、小さなよさを大きなよさに優先させるものであり、好ましからざる逸脱である (§ 25)。なぜなら、

「精巧なものを追う者には、力強さも勢いも欠けている」⁽²⁾ (ホラーティウス)

からである。

(1) キケロー『ブルートゥス』93。以下「消される」に至る一連の引用句も同じ。

(2) ホラーティウス『詩学』26—27。

第8節 美的豊かさ

§ 115

もしある人が、第2節—第6節で数え上げられたいろいろなことを既に身につけ、不適格でない、かなり恵まれた美的主体になりつつあって (§ 27)、その上、美しく思惟すること一般について (§ 17)、そして特に事柄の美について (§ 18)、なお助言を求めることがあったならば、

「剣を鋭くする力はあるが、自分では切ることができない砥石の役を私は果たそう。自分では何も書かずに、仕事と義務とを教えよう。つまり、

1) どこから潤沢な素材が準備されるかを」⁽¹⁾ (ホラーティウス)。

確かに、物事を思惟するとき第1に配慮すべきは、豊かさ(豊富さ、充溢、多さ、富、潤沢さ)である(M. § 515⁽²⁾)。但し、ここでのいう豊かさとは、美的豊かさのことであって、それによって、特定の主体、すなわち一定の思惟者は、特定の客体、すなわち一定の思惟の素材について、一層多くのことを美しく思惟することができよう。

(1) ホラーティウス『詩学』304—307。現代の校訂本では304行は‘funar’であるが、バウムガルテンの引用では‘utar’となっている。意味は近似的である。

(2) M. § 515]

Gradus COGNITIONIS, quo plura cognoscit, est eius VBERTAS (copia, extensio, diuitiae, vastitas), quo pauciora, ANGUSTIA,...

「より多くを認識する段階の認識が豊かさ（豊麗さ、外延、富、広大さ）であり、より少なくを認識する段階が狭さであり、……」

§ 116

プリーニウスがイーサイオス⁽¹⁾の長所のうち最初のものとするのがこれである：「最高の富、豊かさ、豊麗さがある」⁽²⁾（第2巻、第3書簡）。われわれは、これを絶対的な豊かさと相対的な豊かさに分けよう。前者は、美しく思惟されるべきもの全てに必要なものであり（§ 115、22）、後者は、絶対的豊かさのうちの一段階であり、いくつかの美しい思惟内容にのみ偶偶必要なものである。例えば、あまりよく知られていないこと、あるいは、成程有用だが、注意の散慢な者に印象づけねばならないことに必要なものである。後者、すなわち相対的豊かさを、われわれは「プラトンの広さ」と呼ぶことにする。それは、先述のプリーニウスが、エウブラテース⁽³⁾の「語法」は全体に「豊麗」（§ 115）であると言い、しかもそれは「あのプラトンの広さをしばしば真似している」⁽⁴⁾と主張していることによるのである（第1巻、第10書簡）。

(1) イーサイオス] (Isaeus)

小プリーニウスの同時代人で、ギリシアの弁論家。

(2) 小プリーニウス『書簡集』II.3.1。

(3) エウブラテース] (Euphrates)

小プリーニウスの同時代の哲学者。

(4) 小プリーニウス『書簡集』I.10.5。なお、プラトンの文体の「広さ」につ

いては、それを「プラトーン」という名の起源とする伝承をディオゲネース・ラーエルティオス (III, 4: cf. Cicero, *Orator*, 5) が紹介しているほどであるから、古来周知のものであったらしい。

§ 117

美しい思念を持つとうとする人がかなりの広さを追求しようとせぬことも時にはあるが (§ 116)、しかしながら、真に富裕な物事の豊麗さは、いわば盛り沢山の皿⁽¹⁾のように、遠くからでも十分よく広さを現わし示すのである。それは、眺める人が、後でもっと詳しく示されるべきことの素材が枯渇していると考えることがないようにするためである (§ 115)。この意味でウィルギリウスは言っている：

「百の舌、百の口、鋼の声がもし私にあっても、述べ尽くすことはできぬだろう」⁽²⁾。

また、キケローは、「いかなる才能の逆りも、いかなる語り手や書き手の力量も、いかなる」豊麗さ「も、飾ることはおろか、叙述することすらできぬ……」⁽³⁾と言っている。

(1) 盛り沢山の皿] (*lanx satura*)

一年の最初の実りを載せて神々に供えた皿のこと。様々の実りが寄せ集められたところから、転じて多様な詩の寄せ集めを指すようになり、「諷刺詩」を意味する「サトゥラ」の語源となったと考えられている。

(2) ウェルギリウス『アエネーイス』VI. 625—626。

(3) キケロー『マルケルス弁護』4。なお、ここでの叙述対象は、カエサル的事迹である。

§ 118

更に美的豊かさには2種ある。一つは客観的(事柄の、素材的)豊かさ

で、これは、人間の天性の力によって豊かに色どることができる格別の理由が、対象、思惟内容自体のうちに存する場合である。もう一つは**主観的**（天性と人格の）豊かさで、一定の物事を豊かに表象する、一定の人間の自然的可能性、能力である。そして、それはたとえ限定的、仮設的にのみそのようなものであってもかまわない。いわば自分からその富を差し出す対象がある。それらが心に浮かぶや否や、

「充ちた角から幸いなる」豊かさが「現われる」⁽¹⁾（ホラーティウス）。そのとき君は十分なだけの容量を持つことになる。他の人々にとってだけでなく、

「あなたのためにも、田舎の誉れに満ち溢れた豊かさが、豊饒の角より流れ出るであろう」⁽²⁾（ホラーティウス）。

(1) ホラーティウス『世紀の歌』59—60。

(2) ホラーティウス『歌章』I. 17. 14—16。

第9節 素材の豊かさ

§ 119

人間的認識の地平（圏）とは、物事の無限の全体性のうちで、広義における普通の人間的な天性にとって明瞭となりうるような、有限数の素材のことである。そのうちでも、普通の哲学的天性によってかなり完全に把握されうるものが、**理性と悟性の論理的地平**（領域および圏）を構成し、普通の美的天性に対して美しく輝きうるものが、**美的地平**（美しい理性類似者の領域および圏）を構成する。もし何か

「取り扱ってみて光りうる見込みのないものがあれば、捨てるがよい」⁽¹⁾（ホラーティウス）。

(1) ホラーティウス『詩学』150。

§ 120

美的地平の下に位置しているものとは、比較的、相対的な不明瞭さから、普通の美的天性が美しい光の中に引き出すことができぬものである。美しく思惟しようとする者が、このようなものを自分の主題として選びとると、(1) それが真剣になされた場合には、**物事の貧しさ**と「思念の貧弱さ」とが生ずることになり (§ 115, 119の逆)、或いはまた、(2) 自分のでないものに落ち込み、或いはまた、(3) 危険な仕方で戯れることになる。従って、このような主題は、

「いまだ発見されぬまま大地がそれを秘めているときの方が所を得ているのだから、勇気をもって軽視するように」⁽¹⁾ (ホラーティウス)。

「讃嘆されるべき物事の讃嘆さるべき讃辞」⁽²⁾が集められねばならない。

(1) ホラーティウス『歌章』Ⅲ. 3. 49—50。

(2) 讃嘆さるべき物事の讃嘆さるべき讃辞] (*admiranda rerum admirabilium encomia*)

典拠不明。

§ 121

「詩は大空より月を引き降ろすこともできよう」⁽¹⁾。

とはいえ、私としては、**美的地平の上に位置するもの**を素材として選択することは、美しく思惟せんとする者に勧めたくない。ここで私は、人間的認識一般を超越するもののみを考えているのでないし、特にそれを考えているわけでもない (§ 119)。むしろ専ら考えているのは、普通の美的本性では、学の上位の判明な認識・十全な認識⁽²⁾から、かの美しい光へ引きお

ろすことができぬものである。かの光とは、快い薔薇色をしていて、理性類似者と下位認識能力の眼を鈍らせぬものである。それにもかかわらずもし試みたとすると、§ 120で述べた不都合に陥ることになるか、きわめて苛酷に思われる嘲笑に晒されるか、「あの狭い、切りつめられた議論に閉じ込められることになろう」⁽³⁾。これは、キケローの書『弁論家について』第2巻で、ギリシアの「哲学者」一般をアントーニウスが非難する言葉であるが、その際、月並みな「私は彼らの一語も理解できない」という定式を用いている。これは§ 22の逆である。

(1) ウェルギリウス『詩選』VIII. 69。

(2) 判明な認識・十全な認識] (*distincta adaequataque cognitio*)

「判明」な認識については、「序言」註(1)参照。「十全」な認識については、ライプニッツの次の規定がある：

Cum vero id omne quod notitiam distinctam ingreditur, rursus distincte cognitum est, seu cum analysis ad finem usque producta habetur, cognitio est adaequata, cuius exemplum perfectum nescio an homines dare possint; valde tamen ad eam accedit notitia numerorum.

「他方、判明な概念を構成する成分の全てが再び判明に認識されているとき、言い換えれば、分析が終極にまで達したとみなされるとき、認識は十全である。その完全な例を人間が与えるかどうかわからない。しかし、数の概念はきわめてそれに近い。」(*Meditationes de Cognitione, Veritate et Ideis*, GP. IV, 422)

その徴表の判明性をもって表象の十全性を規定する点では、パウルガルテンはライプニッツに一致する：

CONCEPTUS distinctus notarum distinctarum, ADAEQUATUS est, confusarum INADAEQUATUS.

「判明な徴表をもつ判明な概念は、十全であり、混雑な徴表をもつ判明な概念は、十全でない。」(*Acr.* §26. ad W §16 cf. A. Baeumler, *Das Irrationalitätsproblem in der Ästhetik und Logik des 18. Jahrhunderts*. Halle an der Saale, 1923. p. 200, n. 2)

但し、ライブニッツは、十全性を以て概念分析は究極に達するとしたが、パウ
ルガルテンでは、更にその先に「深遠」の段階が置かれる：

CONCEPTVS adaequatus notarum adaequatarum, PROFVNDVS est.

「十全な徴表をもつ十全な概念は、深遠である。」(Acr. §27. ad W. §17. n.

1. cf. *Med.* 14; *Met.* 637; Meier, *Auszug aus der Vernunftlehre*, 147)

(3) キケロー『弁論家について』II. 61。

§ 122

ところで私は、切りつめられたあり方の思惟のために、私の哲学知著作
の大胆な装飾をこれほど多く犠牲にしてきたし、緩かにではあるにせよ、
それを追い求めているのに、それを斥け、非難するというのは矛盾ではな
いか、という人もいよう。ここで、既にストア派のゼノンがとらえ、キ
ケローの『弁論家』113, 114とクィーンティリアーヌスII. 21. があらため
て求めている真理が、少なくともわれわれの時代には一層周知のものであ
ってほしい。その真理とは、思惟には2つのあり方があり、その一方は
「連続的で、一層広いもので、これは修辞学に属し」、もう一方は「切りつ
められ、一層縮約されたもので、弁証法に属する」⁽¹⁾、というものである。
前者は美的地平、後者は論理的地平に特有である、と私は主張する (§ 119)。
「こぶしにした手」と「開いた手」⁽²⁾の比喻を私はもち出すまでもあるまい。
切りつめられたあり方の思惟は、実践的美的主体でもあり、かつ理論的美
的主体でもあったアリストテレースが既に見ている如く、学的内容、特に
講義の場合には確かに必要であるが、他の場所、つまり理性の領域外部で
は欠点となりうる。そして、豊かな言葉を要求する内容において、もしな
にか「つまらぬ試みを頻繁に行なって」論理的地平に「自己を高めようと
する」ものがあるとしたら、「ただ不ぞろいなだけで、いわば砕けている
のであり、際立っているという讃嘆を得ることもないし、均一なもののも

つ魅力をも失う」⁽³⁾と言うだけで十分であろう (Ⅷ. 5)。「弁証法的」力量と能力とは、美的なもの「においては」、諸々の学の論理的「議論におけるほど精密に、且つ切りつめた仕方を用いなくともよい」⁽⁴⁾ (Ⅻ. 2)。

(1) クィーンティリアーヌス、Ⅱ. 20. 7。

(2) 同 上

(3) 同 上 Ⅷ. 5. 29。

(4) 同 上 Ⅻ. 2. 11。

§ 123

多くの素材は、美的地平と論理的地平とに共通でありうる。それ故、何かが学で取り扱われるという理由で美の圏から全く排除されるというわけではなく、哲学的、数学的精密さをもって厳密、精細に把握される限りでのみ排除されるのである (§ 121)。これに対し、同一の素材が、(1)それ自体は美しい悟性によって思惟されつつ、その徴標は感性的、生動的に思惟される⁽¹⁾、或いは又、(2)ここの場合のように、それ自体も生動的で美しいものとしてのみ思惟されることがありうる。この限りで、それは美的地平内部に受け容れられる。

(1) それ自体は……生動的に思惟される]

cf. § 38, 428, 617。

§ 124

「道徳的立派さ以外、どんな善があるか。感覚は真であるか。太陽の大きさはいかほどか」。この種の「問題が、弁論家の役柄からは遠く離れていることは、誰でもたやすく知ることができると」キケローは「考えてい

る。なぜなら、哲学者らの至高の天性が、多くの労をもって費されている事柄を、他の小さな事柄と同じように弁論家に割り当てることは、大いなる狂気であるように思われる」⁽¹⁾。学のうちにあって、美的地平を越えているものがある、とキケローが言うのは正しい (§ 121)。美しい思念をもとうとする全ての者、特に弁論家がそれを自分の主題として選ぶとしたら誤っていることになる (§ 122)。しかし、たとえ弁論家でないにせよ、少くとも実践的美的主体であるならば、実例のところで述べられた諸問題を十分よく説明しうるであろう。但しその際、同一の問題についてであっても、倫理学、論理学、自然学、数学の論証者とは別の思惟方法に従っていないなければならない (§ 123)。

(1) キケロー『発見について』I.8。

§ 125

美しく思惟することの豊かさは、必ずしも全てのものに関して与えられるわけではない (§ 119—121)。キケロー『弁論家について』I.59は、「全ての物事について多彩に豊かに語りうるのは、無欠の完全な弁論家のみである」としているし、賢明なストア派の徒は、大衆うけを狙う詩人に

「弟子らの席の間で泣きわめくがよい」⁽¹⁾

と命じて、大衆の好むものが、詩作の主題としては必ずしも相応しくないとしている。しかしだからといって、麗しく思惟する能力が存するのは、市民間の係争や、その他のあまり重要でない問題のみに限られるわけではなく、専門の学問や学にも関わっている。それは、1) 神学、自然学、実践学、歴史学などに属し、質料的には既に直観された学理を、「あまり高い教育を受けたわけではない人々にも親しめるような」(同、II.61) 仕方

で思惟、表示する場合とか、2) 註という形で学の中に挿入されるべき実

例⁽²⁾の場合である (§ 123 cf. キケロー『弁論家について』 I. 61⁽⁴⁾)。

(1) ホラティウス『諷刺詩』 I. 10. 91。

(2) 註という形で学の中に挿入されるべき事例]

cf. カント『純粹理性批判』第1版序文 XII「また私は、無味乾燥で厳密に学問的な講述をしても、本書はなかなかの分量になることに気づいたので、通俗的な目的にこそ必要な実例や説明によって、本書をこのうえ嵩だかにしないほうがよいと思った。」(篠田英雄訳、岩波書店、岩波文庫、1961、1973 (上) p. 21)

(3) キケロー『弁論家について』 I. 61]

「恐らく、次の点はあなたを納得させられぬかもしれぬが、いずれにせよ、ためらわずに考えを述べよう。その自然学自体も、数学も、少し前にあなたが他の学術に固有のものとしたものは、それら専門家の学に関わるが、もし誰かが自分の学術そのものを言葉で美しく飾ろうと望むなら、弁論家の能力に助けを求めねばならない。」

§ 126

最初の神学者らは、神統譜の詩人らであった。彼らに

「弦で神々と神々の子らとを歌うことを、ムーサは許した」⁽¹⁾ (ホラティウス)。「流れる髪の毛のイオーパスは、最も大きなアトラスが教えたものを、黄金のキタラで響かせる。このイオーパスは、巡る月と太陽の食とを、どこから人類と動物とが生じたか、どこから雲と雨とが生ずるか……を歌う。」⁽²⁾

「テュリア人らは喝采で唱和し、トロイア人らがそれに続く。」⁽³⁾ (ウァルギリウス『アエネーイス』 I. 745)

「事柄をあなたにソークラテース派の書物は教えることができる。」⁽⁴⁾

「祖国に何を、友人に何を為すべきか、どんな愛をもって両親、兄弟、客人を愛するべきか、元老院議員や裁判官の仕事はどんなものか、戦争

へ派遣された將軍の職分は何か、を学んだ者が」⁽⁵⁾、
 きわめて重大な物事を一般民衆の感性に合わせ、そうして
 「虎と荒れ狂う獅子とをなだめ」⁽⁶⁾、
 「豎琴の音で岩を動かし、魅力ある祈願で」⁽⁷⁾、
 「公事と私事を、聖と俗を分け、乱脈な同棲を禁じ、既婚者らに法を与
 え、町を建設し、法律を木材に刻み込む」⁽⁸⁾（ホラーティウス）
 すべを心得ているならば、かつての麗しい知恵の名と誉れとを再興する手
 段を持つことになるう（§ 123）。

「これに対し、時代の証人、真理の光、時代の行状、生活の導き手、真
 理の伝達者たる歴史が」⁽⁹⁾いかによく「不滅へと委ねられ」うるか（§ 125）
 を教えるべきは、リーウィウスのたった一つの思惟のあり方、「緩やかで、
 なだらかで、或る種の均一な滑らかさをもって流れる」⁽¹⁰⁾あり方である。
 （キケロー『弁論家について』 II. 36, 64）

- （1） ホラーティウス『詩学』 83。
- （2） ウェルギリウス『アエネーイス』 I. 740—743。
- （3） 同 上 I. 747。
- （4） ホラーティウス『詩学』 310。
- （5） 同 上 312—315。
- （6） 同 上 393。
- （7） 同 上 395。
- （8） 同 上 397—399。
- （9） キケロー『弁論家について』 II. 36。
- （10） 同 上 II. 64。

§ 127

美的地平内部に位置するもののなかには、論理的地平と共通でないもの
 がある（§ 121—126）。それについて一層美しく、一層多くのことを思惟

することは普通の美的天性に許されるが、学問的で、一層正確な配慮をもって (§ 120) 洞察することは、人間の力の耐えるところではないか、あるいは、自分のことだけで手一杯の活動にはやりがいのないことであるように思われる (§ 119)。例えば

「勝利を得たボクサーと、レースで優勝した馬と、若者らの悩みと、心を解きゆるめる葡萄酒とを述べる」⁽¹⁾

ことがそれであろう。

(1) ホラーティウス『詩学』84—85。

§ 128

或る素材が将来十分内容豊かになるかどうかを力動的美的主体⁽¹⁾が調べようとするとき、それを教えるのは、他人 (§ 60, 61) もしくは自分自身による審査である。すなわち、美しい思惟において訓練された (第3節) 本性のみによってか (第2節)、それとも、技術に助けられた本性によって (第4節) 主題が最初に心に浮かんだとき、その主題において美的主体は諸々の力のいわば予審をするのである。もし心のかなり大きな衝動によって自分は一定の主題へ引き入れられていると感じても、何らか事柄の貧しさ、作品自体を形成することの不毛な貧弱さを経験するならば (§ 120)、或いは又、全てのものが堅固で無垢ではあるけれども、精細で、切りつめられた仕方では精神に現われてくるならば、それを捨てるのを躊躇するな。それを優美に実現する能力を諦めねばならぬ理由が事柄のうちにあるにせよ、自分自身のうちにあるにせよ (第5節、および § 119)。

(1) 力動的美的主体] (aestheticus dynamicus)

§ 60, 61参照。

§ 129

この審査のために勧められるべき技術には2通りある。1) 類比的技術。これによって、一つの美しい認識内容から、還元の原理を介して、部分的に異なる同一のこと(類似したこと、等しいこと、一致すること)が推論される。全ての雄渾な模倣、及び、到るところにある改作^{パロディ}の全てはこれに基づいている。この技術によってウェルギリウスは『牧羊詩』ではテオクリトスに、『アエネーイス』ではホメーロスに従ったし、テレンティウスはメナンドロスに従った。私はこのやり方を試してみ、かなり有効であったことを否定はしない。剽窃の罪を告発するために選任された検察官^{ケンソール}らをあまり恐れるな。実際に資格のある判定者の判決は次のものである：

「誰でも知っている素材も君個人のものとなろう」⁽¹⁾(ホラーティウス)。
けれども、やはり同じホラーティウスの次の定義を無視するな：

「一語一語、逐語的に訳したり、そこを出発点として歩を進めるのを恥じらいと作品の法則とが不可能にするような狭いところへ、模倣しようと跳びおりてはならない」⁽²⁾。

(1) ホラーティウス『詩学』131。

(2) 同上 133—135。

第10節 トピカ

§ 130

2) トピカ又はトポロギア。これは、論証を発見する技術乃至学問として定義される (§ 26. キケロー『トピカ』2)。キケローはそれを「発見の技術」と呼び(同書、6)、又、アリストテレースは、多くの人に伝授

しつつ、いわば自らの権威でそれを確立した。しかしながら、実際のところを言えば、それは発見術であるというよりは、むしろ、その主語と結びついた一般概念の一定の秩序に従って、一定の主語の諸々の述語を記憶によびさます技術である。

§ 131

トピカの学科は、特に悟性的認識に論証を供給すべき論理的トピカ (§ 130)、感性的認識を促進すべき美的トピカ (§ 17) に分けられうる。論理的トピカは、更に分析的と弁証法的とに分かれる。分析的トピカとは、論理的に証明しようとする問題、すなわち、完全に確実なものから完全に確実なものとして導き出そうとするような問題にとりかかるのを助けるものである。弁証法的トピカとは、蓋然的な与件について、一般概念と予在概念の豊富な材料を準備するのを助けるもので、これらの材料から、疑う理由よりも同意する理由の方が一層多くの重みを持っていることを推論することができる。この弁証法的トピカを、アリストテレースは自分が修めるべきものとして選びとった。但し、この弁証法的トピカに有効な多くのものが、分析的トピカだけでなく、美的トピカにも有益に適用されるような仕方であった (§ 130)。

§ 132

思念するために選び取った主題に結びつけて、そこから論証——広義では、内容を豊かにする論証、高貴にする論証、例証する論証、感情をひきおこす論証 (§ 26)、狭義では、証明する論証、又は説得する論証 (§ 131)——が生じうるかどうかの査定をするための一般概念がトポス、すなわち論証の座である。このトポスは、その秩序が記憶されているあの系列の部

分をなす。このようなトポスとして勧められうるのは、**普遍的なもの**と**特殊的なもの**とがある。普遍的トポスとは、全ての問題、全ての主題に適用しうるもの、それについて思念を持とうとするいかなる物事にも連続的に結合しうるものである。特殊的トポスとは、一定の類の一定の主題のみに特有なもので、例えば、与えられた主題をそこに還元しうるところの学科のあり方に応じて異なっているものである (§ 131)。

§ 131

このような普遍的トポスの定式で、自然的あり方の思惟の方へ多少傾斜したものとして、次のような詩句は子供でも知っている：

「誰が？ どん助けで？ 何を？ どん仕方で？ 何故？ どこで、いつ？」。

これよりも重要とかつてはみられ、論理学者らも取り扱ったもう一つの定式を示すのが、アリストテレースの十の範疇である。それは、アリストテレースが最初に編成したものか、それとも他の人が既に構成していたのを、アリストテレースが有名にただけなのかはわからないが。ずっと時代は下るが、学にも寄与しようとする新しい定式を提示しているのはルルス⁽¹⁾である。これについて、ブルッカー⁽²⁾の『批判的哲学史』第4部第1章が語るところを読めば (p. 16—21)、それをマルティアリスの言う不毛な技術に結びつけて考えざるをえないであろう：

「労多くして、益少なきことに着手するのは恥ずべきことであり、また、つまらぬことに労を費やすは愚かなことである」⁽³⁾。

ラムス⁽⁴⁾はまた別の定式を追ひ求めた。彼は、弁論家の役柄には十分でないにせよ、キケローの模倣者である。原因的方法 (caussalis methodus) が教育ある者らの全ての階層にわたって強くなったのは、彼によるものである。

- (1) ルルス] Raimundus Lullus, c1235-1316. フランシスコ会修道士。彼の *Ars Magna Raimundi* は、基本的な原理、概念を設定し、そこからできるだけ多くの結論を引き出そうという構想で書かれている。
- (2) ブルッカー] Johann Jacob Brucker, 1696-1770. ドイツの哲学者。その著『批判的哲学史』(*Historia Critica Philosophiae*) 5巻は、ドイツ最初の哲学史であり、18世紀後半の標準的哲学史であった。
- (3) マルティアーリス II. 86.9-10。
- (4) ラムス] Petrus Ramus, 1515-1572. フランス名ピエール・ド・ラ・ラメ。フランスの論理学者。独自の論証術をつくりあげた。

§ 134

この方法 (§ 132) によって、いかなる主題においても、その I. 最高類、II. 中間類、III. 最下類、IV. 種、V. 個を、そしていかなるものにおいても、その、I. 本質と本質的なもの、II. 特有および共通の属性、III. 様態、VI. 観点と関係を概観することができよう。このような補助を喜ぶ人、或いは、それが自分に寄与するだろうと考える人には、新たな技術は必要ない。存在論者らの定義された重要項目を含む概説書を記憶するがよい。そうすれば包括的なトピカを持つことになる (§ 132)。

§ 135

十分完全に認識されたいかなる学問でも、特殊的トポスを与えることになる。それは、その学科が自己の対象において注目すべきかなり重要な諸契機を、ひとが短い精髓の形で表わして、記憶にかなり深く刻み込む場合である。それらの富を多少とも調べようとする人は、これらの契機の系列に従うことによって、それに一層密接に関連する主題を連続的に予審し、そこから自分のやり方を引き出すことができるであろう。美しい教養がそ

れに寄与するであろう (§ 66)。独一的な主題と個別概念⁽¹⁾とは、注目されるべきこのような徴表を最も多く持っている⁽²⁾。そして、最も同族的な学科の本箱を、かなりの益を伴って探査するための述語や、大部分認識されたかかる個別概念の個体的差異が、共通トポスの代わりをすることになろう。これをも欠いているときには、このような個別概念を君の主題に選びとるなかれ。何の必然性もないのだから (§ 115)。

(1) 個別概念] (idea)

cf. *Acr.* 44:

Conceptus singularis vel individui est IDEA; conceptus communis s. eiusdem in pluribus, est notio.

「個別的概念、または個物の概念が個別概念である。共通な概念ないし多くものにおいて同一なものの概念が一般概念である。」

Aes. 440:

VERITAS AESTHETICOLOGICA, § 424. vel est vniuersalium et notionum, iudiciorumque generalium, vel singularium et idearum, M. § 148. Illa GENERALIS. Haec SINGVLARIS esto. Veritatis generalis in obiecto nunquam tantum veritatis metaphysicae detegitur, praesertim sensitive, quantum in obiecto veritatis singularis, M. § 184.

「美—論理的真理 (§ 424) は、普遍的なものとは一般概念のもの、そして一般的判断のものであるか、個別的なものと個別概念のものであるか、いずれかである (M. § 148)。前者を一般的、後者を個別的としよう。一般的真理の対象において、個別的真理の対象におけるほど多くの形而上学的真理が開示されることは——特に、感性的に開示されることは——決してない (M. § 184)。」

(2) 独一的な主題と……持っている]

cf. *Aes.* 17, 559; *Med.* 18—19; *Met.* 148.

§ 136

しかし、私は初等課程を終えて以来、論理学者の正確さと証明の厳密さよりも、むしろ優美なあり方をめざして何かを思念により構成しようとしたが、そういうとき、探求対象の何らかの豊かさ、豊富さを自分で準備するという目的のために特に有用なトポスを欲求したり、適用したり、試みたりしたおぼえがない。それは普遍的トピカであれ (§ 132)、特殊的トピカであれ (§ 135) 同様である。しかし、トピカについての私の判断を挿入することが許されるならば、訓練と本物の戦いとをここでも区別する必要があるように思う⁽¹⁾。前者は、専ら練習のために企てられた、豊かに思惟する試みであり、後者は、既に他の点で普通に訓練された本性によって完成され、完結した作品として、一層多くの人々に対し公刊したり、はつきり示されたりすべきものである (第3節)。

(1) 訓練と本物の戦いを……思う]

cf. キケロー『弁論家について』II. 84: 「実戦、戦列が要求するものと、われわれの遊技場、練兵場が要求するものとは別である。」

§ 137

私が § 136で記述したような訓練において、美的地平内部で構成された (§ 119) かなり多くの主題のために私が選ぶのは、どのトポスによってもよいが特に包括的トポスによる (§ 132) 頻繁な、勤勉に続けられた反省である。なぜなら、豊かに思惟する能力が、いかなる方法によってであれ、ともかく訓練される方が、他の条件が等しい場合には、一層大きな能力を全く獲得しなかったり、ようやく少しばかり陶冶された能力が鈍化し、いわば干上がるのよりも望ましいからである (§ 48)。トピカが完全になればなるほど、そして、トピカが訓練と記憶との経験によって有益になれば

なるほど、それだけ、普遍的なものにおいても、或るトピカが他のトピカに比べて一層勧められうるものになっていくであろう (§ 133, 134)。但し場合によってはルースの技術そのものも追い求めることに私は反対はしないであろう。もしも、目立つ欠点に対する何らかの意識を伴ってそれがなされるならば (§ 133, 49)。

§ 138

§ 136で述べた訓練、又、§ 58で述べた一層正しく、一層確実な訓練、それにもまして、特に訓練の為にはこれ以上豊かなものはないところの思念 (§ 136) は、次の言葉が自分のためのものであると考えてよい：

「君は平易な、踏みならされた地を徘徊することはないだろう。」⁽¹⁾

もしも

「筋に寄与せず、ぴったりと密着していないもの」⁽²⁾

が特に心に浮かんでも、それを切りおとすならば (§ 18)。それ故、これらにおいて自分に課せられた役割を覚えている者は、次のことを容易に予見する——すなわち、全ての物事に合う包括的トピカ (§ 132) に望みうるものは、彼の主題に述定される述語のうちで最も普遍性、共通性の高いもの、すなわち、あまりに遠い高いところから求められた、あまりに陳腐な余談を示すもの、又は美的地平を越えたところで構成された (§ 121) 完全性のみを思念に仲介しようとするもの (§ 15)、せいぜいそういうものにすぎないということ——それを容易に予見するのである。従って彼は、これらのトピカの補助から材料をかき集めようと心をくだくことはあまりないであろう。そういった材料が麗しく思惟することに寄与することはほとんど、あるいは全くないであろうから。

(1) ホラーティウス『詩学』132。

§ 139

特殊トポスについては、より穏やかな考えを持つよう真理は命じている (§ 132)。なぜなら、特殊トポスに従う者も、§ 138で述べた誤り、或いは、§ 110で述べたわざとらしい、不自然なあり方の思惟に陥ることがありうるにせよ、何か或る一つの学科に属し、いわば自分の主題とともに準備された奉納板から、やはり見事な富を持ち帰ろうとする人は、これらの断崖を美しく避けることができる⁽¹⁾ (§ 135)。無縁の例には今は関わるまい。暗記用の詩句 (§ 22)⁽²⁾が美的トピカの役を有効に果たすのは、私の見るところ、次のような人々の場合である。すなわち、その詩句の示している個々の言葉の、十分にはっきりした知識を、私の省察しているこの理論によって、ないしは別のところから準備し、第2—5節で述べられた普通程度に恵まれた天性によって、何か或る主題が一見しただけで直ぐ斥けるべきでないものであるならば、それをいわば予審訊問にかけ、美しく思惟するためのふさわしい素材をそれが惜しみなく、気前よく自分たちに供給してくれるかどうかを探索するために選びだす人々である (§ 118, 128)。

- (1) いわば自分の主題とともに準備された奉納板から、やはり見事な富を持ち帰ろうとする人は、これらの断崖を美しく避けることができる] (*possunt... hi scopuli pulcre vitari copiam nihilominus bellam... veluti votiva tabula cum suo themate comparata reportaturo*)

難破を無事に逃れた者は、その様子を描いた板絵を海神に捧げる習慣が古代にあった。cf. ホラーティウス『歌章』 I. 5. 13—16:

me tabula sacer

votiva paries indicat uvida

suspendisse potenti
vestimenta maris deo.

「濡れた衣服を私が
海の有力な神に掛けたことを、
神聖な壁は、奉納した板によって示している。」

(2) 暗記用の詩句 (§ 22)]

豊かさなど6つのものを読みこんだ詩句。

§ 140

美的トピカのもう1つの定式をつけ加えよう (§ 131)。下位精神能力がより多く、より完全になればなるほど、そして又、悟性と理性の管轄下に、与えられた主題を美しく思念することに寄与するものがより多く、より大きく、より一貫したものになりうるほど、それだけ一層その主題は美しい思念にふさわしいものとなるであろう (§ 22, M. § 185)。それ故、§ 128、139で記述した精神を持つ人が心理学者であった場合（そしてこのことは多くの理由からとりわけ必要であると思われるが）、自分の主題を概観し、精神の持つ、十分完成された感性的諸能力の或る種の目録に照らし合わせて、それをいわば予審的に検査すべきである。それはおよそ次のような訊問によってである——与えられた主題を私はしばしば知覚したことがあるか、それには多くのものが含まれているか、十分の品位を持つものがあるか、真実らしいものがあるか、十分生動的に据えうるような光を持つものがあるか、等々 (§ 139)。私はいまだに知覚することができるか、それを想像することが許されるか、その持つ多くのことを想像することが許されるか、等々。それに似たもの、等しいもの、一致したもの、釣り合ったものを多く私は知っているか。その他のことは、例えば *Met.* 第3部第2—17章の心理学や、美学、§ 431のその梗概自体が供給してくれるであろう。丁度、存在論の梗概が包括的トピカの役割を果たすのと同じである (§ 134)。これらの梗概は

「この用途のために与えられたのではない贈り物」⁽¹⁾
のように思われるものをここに呼び出すことが許されたなら、実際に扱ってみることによって、きわめて容易にその内実を充たしうるのであろう (§ 119, 123)。

- (1) ウェルギリウス『アエネーイス』IV. 647。但し、パウルガルテンの挙げる字句は、主要写本の読みとは多少異なる。

§ 141

いかなるトポスの技術に従って整備されたものであるにせよ (§ 130—140)、このような予備的蒐集に没頭した者を、第5節で述べたあの心の衝動と興奮とが批難するならば、もはや論争は十分、否それ以上の寄与をしたと判断して、それがどこにあるものであれ、トポス一切を投げ捨てよ (§ 132)。トピカの仕事を中断するがよい。そしてあたかもそれらが周知のものであるかの如くに、出来事と事態の核心に急迫しつつ、憑かれた如く全体に着手し、眠目を据え、未来の作品の主要部分を形成せよ。

「風が帆を呼んでいる」⁽¹⁾のだから、

「帆全体を広げよ」⁽²⁾。

トポスの織物を不名誉に作り上げ、

「西の順風が吹くのには耳をかそうとせぬ」⁽³⁾

うちに、最も大事なことを逡巡によって失い、前準備と引きかえに、作品そのものをすぐれた仕方で完成することの最も大事な部分である (§ 95) ところの弾みを逃してしまうことがないように。もしこの好機を勤勉に用いたならば、

「順風が両方の帆脚索^{ほ あしづな}に同時に当たったであろうに」⁽⁴⁾ (カトゥルス)。

- (1) 典拠不明。

- (2) ヌウエナリス I. 150.
- (3) ウェルギリウス『アエネーイス』IV. 562.
- (4) カトゥルス IV. 20—21.

第11節 内容を豊かにする論証

§ 142

既に私は広義の論証を定義し、内容を豊かにする論証への言及を行なった。そして、思考の文彩の区分は論証の区分と同一であるとするのが便利であることを示しておいた (§ 26)。既にたやすく推論しうることであるが⁽¹⁾、論証の力が大きくなればなるほど、論証自体が大きいもの、よいものであるだろう。しかるに、論証が他のもの——例えば主要主題——の豊かさのみでなく、同時に重さ、重要性等にも少なからず寄与するならば、それだけ一層その論証自体が力を持つものであるとせねばならない。従って、この強さの尺度に従えば、他のもの——例えば主要主題——の認識を一層内容豊かで、荘重で、真実で、明瞭で、確実で、熱烈なものとして完成するような論証と文彩が、最も美しいものであることになろう (§ 22)。

- (1) 既にたやすく推論しうることであるが]

以下、§の末尾までの部分が、全体として三段論法を形成していることを、ひとは容易く察知しうることであろう。

§ 143

論証も文彩も、同時に多くの効果を持つことが可能であるが、それらの力のうちで一層重要なもの、又は、目下のところ最も多くわれわれが注目している目的をもつ力に従って命名することによって、論証、文彩は、上

述の区分のいずれか1つに数え入れることができる。さて、作品全体を見事に思惟することの豊富さと富とに何がしか寄与する力を持った論証と文彩が、私の見るところでは、内容を豊かにするものである。その際、この力は他のものとの関係において3つのあり方が可能である。1) その力が唯一のものであるときには、私は最も低く評価する。2) その力が唯一のものではないにしても、最も強いものである場合には、私は1) よりも高く評価する。3) 目下注目している力以外にもいくつかの思惟の長所があり (§ 22)、目下のものに劣らず恵み豊かな富をそれらにも認めることになる場合、私は最も高く評価する (§ 142)。

§ 144

いかなるトピカであれ、少なくともその第1義においては (§ 143)、普通の教育を受けた天性に、内容を豊かにする論証を与えることになる。 (§ 130—140)。§ 139, 140で、第1のトposおよびトpos分割にのみ含めたものは、単にこのようなもののみを生み出すにすぎないが、他のトposおよびトpos分割に含めたものは、豊かさ以外に、別の1つ又はそれ以上の長所を、それらの秩序に従って思念する者の眼前に据えることになる。それ故、混雑した材料の中から何か目的に適用しうるものがないかどうか、又、適用しうるとしたらどんな仕方でかを選びとる——そういう判断力の継起的活動を他のトピカは要請するが、トposの最後の2つの種類は、判断というこの活動を、同時に発見の、否むしろ想起の活動に結びつけることになる (§ 130)。

§ 145

普通に文彩とされるいくつかのものは、例えば措辞の文彩など、表示形

式自体の文彩である (§ 26)。しかし、もし或る人が一人前の男として文彩を用いるならば、文彩の力と美は物事と思惟自体に現われる。従って、正しく据えられた思考内容も、文彩において場を占めるに値する。措辞の文彩の例を引くことにするが、それらの名はかなり周知のものであるから、通常の呼び名を挙げておく。又、それらのうちで、内容を豊かにすると云ってよいものもいくつか挙げておく。冗語法とは、何か余分なこと、そして類縁の語彙によって既に十分に言われたことを表現しているようにみえるものである。しかし、余分と見なされたものが、少なくとも指示された事柄の一層充実した認識のためによく働いていると鋭敏な判定者に認められない限りは、文彩でなく、欠点である (§ 143)。

§ 146

全体が一致している同義は文彩でないが、一部分が一致している同義は文彩である。それは、何らかの同義語に付着しているいくつかの概念⁽¹⁾の相違によって、指示対象たる事物が、部分的同義語の1つによる場合よりも豊かに据えられる場合である。労作法 (exergasia)⁽²⁾ とは、いくつかの句の間に等しい比例がある場合である。ここで句というのは、既にかかなりの程度結合されてはいるが、いまだ節を構成してはいないいくつかの語のことである。結合法 (synthesis) 又は統合法 (synesis)、および「構成法」(compositio) とは、統辞法に反して語を結合し、それによって、顕在化されているものを越えて、統辞法が勧めるその部分的同義語を思惟させるものである。これが文彩であるならば、隠れた同義ということになる。もっとも、この同義は文彩でなければならないが。エリプシス (統辞上必要な語の省略) 自体もこれに属する。それは、読み手や聞き手が語群のうちに断絶を認める場合である。彼は

「隠れているものは、みな一層よいものであると思いつつ」⁽³⁾

僅かな語数で表示しうる内容よりも遥かに多くのことを、自分で補完しつつ、思い描くのである。

(1) 付着しているいくつかの概念] (*adhaerentes conceptus*)

cf. *Mcd.* 23:

Conceptus A, qui praeter notas conceptus B cum ipso repraesentatur, ipsi ADHAERET et cui alius adhaeret, dicitur CONCEPTUS COMPLEXUS, oppositus SIMPLICI, cui nullus adhaeret.

「概念Bの諸徴表を別にして、概念Bとともに表象される概念Aは、概念Bに付着している。そして、別の概念が付着しているものは複合的概念と呼ばれる。これは何の概念も付着しない単純概念に対立する。」

Met. 530:

PERCEPTIO praeter notas, quas maxime in eius notis attendo, alias etiam minus claras continens, est COMPLEXA; COGITATIONIS COMPLEXAE notarum ille complexus, quem in notis maxime attendo, PERCEPTIO PRIMARIA, complexus notarum minus clararum PERCEPTIO (secundaria) ADHAERENS dicitur. Hinc perceptio complexa est totum perceptionis primariae & adhaerentis, § 155.

「そのもつ諸徴表のうちで私が最も注目する徴表の他に、さほど明瞭でない他の徴表をも含むのが複合的表象である。複合的思惟の諸徴表のうち、私が最も注目する徴表の総体が主要表象と呼ばれ、さほど明瞭でない諸徴表の総体は付随的(2次的)表象と呼ばれる。それ故、複合的表象は主要表象と付随的表象の全体である (§ 155)。」

(2) 労作法 (*exergasia*)

古代に *expolitio* と呼ばれた文彩である (cf. L. A. Sonnino, *A Handbook to Sixteenth-century Rhetoric*, London, 1968)。

(3) オウィディウス『転身譜』I. 502が出典であるが、文脈的な必要から、若干の変更が施されている。

§ 147

変換法 (hypallage)⁽¹⁾ は、舌が心よりも先ばしるように思われた語の意味が、修整のようなものによって実際に付け加えられる意味、又は、いわば修整すべきものとして読者や聴き手に残される意味と一緒にあって、工夫をこらした変換法なしになされうるよりも充実した円やかな仕方で事柄を据えるときにのみ、文彩となるであろう (§ 145, 143)。ホモイオテレウトンは、わが国の詩人の何人かにとっては耐え難い軛であるが、トピカのうちに数えられてもよいほどであるという意味で、思惟の豊かさ、豊富さ、富に大いに寄与すると言うような人々もいる (§ 130)。迂説法は、他の諸目的をも美しく達成するものだが、それらに加えて、1つの語で事柄について喚起しうるのはやはり1つの概念であることを予見するならば、1つの言葉の代わりに、迂説法でいくつかの語を置くことによって、それらの語と同数の部分的概念を、一なるものの場所において、その事柄について喚起するという目的をも持つことが望ましい (§ 145)。

(1) 変換法 (hypallage)]

hypallage の語義は時代によって異なる。古代には、或る形容詞が、本来かかるべき名詞でなく別の名詞を修飾する文彩を指す。例えば、「孤独な二人は暗い夜の闇を通して進んだ」の代わりに「暗い二人は孤独な夜の闇を通して進んだ」(ウェルギリウス『アエネーイス』VI. 268) と言う如く。16世紀には、形容詞と名詞以外の文章成分の入れかえも含まれていた。例えば、「窓を開けて、昼かどうか見て下さい」の代わりに「昼を開けて、窓かどうか見て下さい」と言う如く。

§ 148

普通は思考内容の文彩にも数えられる文彩 (§ 145) のうちで、内容を

豊かにするものに含まれるものを1つだけ例として挙げよう。それはプラエテリティー（「～については述べる必要はあるまい」というような言い方）である。このプラエテリティー、又は、その隠蔽形である累積法を正しく用いることを知っているならば、多くのことを、しかも短く語る（§ 143）のに成功するだろう。同時に、その人は、いかにも立派な設備の間をまるで目もくれずに、堅固な足どりで進んでいくようなものであるから、それに注目した観客は心の中でこうつぶやくことになる（§ 117）（そして又、自然がわれわれに許した真に美しい事柄の全てについてもこう語られて欲しいものである）。

「材料はきわめて豊かに富んでいるので、仕事に職人が不足するほどであり、職人は仕事に事欠かない。」（パエドルス）

第12節 本性の豊かさ

§ 149

たまたま私が主題として選びとった事柄が、美的にきわめて豊かなものであったにせよ、そのみに私は目を向けるわけではなく、思慮深く私自身をも

「振り返り、私の周囲にどんな豊かさがあるか検討する」⁽¹⁾（ウィルギリウス）。

もし何かを美しく思惟することに心が耐えるならば、主観的豊かさについても問われる（§ 118）。丁度視覚の場合と同じく、美的なるものにおいても、誰もが自分の地平を持っている。そして、大勢の人々の美的地平にあるものが、しかし私の地平の内部にはなく、それを超越するか、その下に押し下げられているか（§ 119—121）、その外にあるというようなこともありうる。丁度地理学で、現われつつある地平が、広がったり狭かっ

たりするのと同じように、私の美的地平も収縮したり、拡張したりすることがありうる。時折

「3 エルにすぎぬ天の空間しか開いていない」⁽²⁾
ところの天性もある。

(1) ウェルギリウス『アエネーイス』II. 564。

(2) ウェルギリウス『詩選』III. 105。

§ 150

麗しく思惟することの最初の諸規則には (§ 149)、自分の「力に釣り合った素材を選びとれ」、

「そして、腕が何を支えるのを拒むか、何を支える力があるか、長い間熟考せよ」⁽¹⁾、

というものがある。それ故、美しく思惟しようとする人格の諸要件に関連するのは、第2—6節で述べられたものだけでなく、特に、彼の力が一定の素材を、一定の弾みを以て、一定の時と所で豊麗に (§ 22) 思惟するのに十分であるということである。

(1) ホラーティウス『詩学』38—40。

§ 151

それを持ちこたえることが先天的にも後天的にもできない役柄を引き受けることがないように (§ 150)、美的主体の一定の種類の特殊的性格を今度は探査せねばならない (§ 27)。I. 他の点では生まれつきすぐれているが、一定の種類の与えられた素材を見事に色どるのに好都合な生まれつ

きの特質も備わっているか？ 例えば次のようにである（第2節、§ 105）。

「不敗のカエサルの特質を語るがよい。その苦勞にみあう多くの報賞を受けることになる。——そうしたいのですが、御老人、私には力が欠けています。なぜなら、槍をもって恐れられた軍列や、投槍を碎かれ死につつあるガリア人らや、馬からすべりおちるパルティア人の傷を描写することは、誰にでもできるわけではありません。」⁽¹⁾（ホラーティウス『談論集』第1巻10）

（1） ホラーティウス『諷刺詩』II. 1. 10—15。

§ 152

II. 与えられた主題が関連する特殊の種類の見事な思惟に対し訓練を行ない、長い手間をかけて既に準備ができていないか？ またその訓練によって同時に得られる器用さを、十分なだけもう持っているか（第3節）？ 生まれつき詩人の素質はある人でも、大学にはいってはいじめてラテン語で詩を書く技術の初歩を身につけようとする、ラテンの詩にはあまり向いていないということを私は経験で知っている。「人間は語ることによって語りうるようになると言われる」。しかし、たとえかつては語ることによく熟達していても、「思惟することに時間をかけ、相当の準備と精密さを以て語る」という訓練が中断するならば、「悪く語ることによって、人間は悪く語ることをきわめてたやすく達成する、という言葉もまた正しい」（キケロー『弁論家について』I. 150）。

「私は少年のころ、しばしば長い一日を歌ってすごしたのを覚えている。だが今は、それほど多くの歌も私は忘れてしまった。もう声すらこのモエリスから失われる」⁽¹⁾（ウィルギリウス）。

(1) ウェルギリウス『詩選』IX. 51—54。

§ 154

Ⅲ. 君が選択した、若しくは選択すべき主題が密接に関わる美しい教養の諸部分を、君は普通に身につけているか？ それとも、君の特殊的作品を完成、構成する際に従わねばならぬ規則の属する特殊的技术に君は通曉しているか？ (§ 67, 69, 第4節) 誰でも、自分の知らないことについてはきわめて醜く語る、と言われているのは正しい。だがもし「ソクラテスが常々言っていたこと、すなわち、誰でも自分の知っていることにおいては十分雄弁であるということ」は真実でないにせよ、確かに「自分の知らぬことにおいては誰一人能弁ではありえない、というのはかなり真理に近い」(キケロー『弁論家について』I. 63)。「何の思考内容、学の裏付けもない、最も立派で、最も飾られた言葉の空しい響きほど馬鹿げたものがあるか」(I. 51)。

§ 154

「学識が生来の力を促進し、正しい陶冶が心を強くするならば」⁽¹⁾ (§ 153)、
無知なあり方の思惟が、主人たる本性 (§ 151) と、「その1つの徳に他の全ての徳が含まれている熱心さ」(キケロー『弁論家について』II. 150) (§ 152) とに、欠点をこすりつけることはない (§ 107)。また、鈍いあり方の思惟が、本性と熱心さとを

「技術を無視しているという不名誉な非難で押しつぶすこともない」⁽²⁾ (§ 108)。

「判定者が誰でも音調の悪い詩を見分けるというわけではない。だから

といって私は規則を破ってよいものだろうか。それとも、皆が私の欠陥を見ると考えるべきだろうか。安全第1で、許される見込みのあるものの内部に用心深くとどまるならば、私は確かに誤ちを避けうるが、賞讃に値することもない」⁽³⁾。

- (1) ホラーティウス『歌章』IV. 4. 33—34。
- (2) ホラーティウス『詩学』262。
- (3) 同 上 263, 265—268。

§ 155

IV. 傑出したものの必須の条件たる心の衝動と傾きとを一般に期待することができるような

「位置を現在君は人間社会において占めているか」⁽¹⁾、それとも、与えられた主題や選びとるべき主題が、内包的及び外延的及び延長的に⁽²⁾要求するだけの質と量とをきっかり持つ精神の燃焼を感じているか、若しくはそれを期待することが許されるか（第5節）？

「物事だけでなく、物事の時を問うのも判定者の仕事である。時を問うならば、汝は安全であろう。歌は書き手の閑居と暇とを要求する（§ 84）。海が、風が、厳しい冬が私を苛む。」⁽³⁾（オウィディウス『哀歌』I. 1）

「武器と熾烈な戦争とを重々しいリズムでうたって公刊する準備を私はしていた。それがこの韻律には相応しいから。第2行が第1行に等しかった。それをクピードーが笑い（§ 87）、1つの脚を取り去ったと言われている。」⁽⁴⁾（オウィディウス『恋のうた』I. 1）

「戦闘と征服された都市を語ることが欲していた私を、ポイボスは琴で叱った。トゥルレーヌムの海原に小さい帆で進まぬようにと。」⁽⁵⁾（ホラ

- (1) ペルシウスⅢ. 72。
- (2) 内包的及び外延的及び延長的に]

「内包」及び「外延」は無時間的概念であり、思惟乃至表象がそれぞれ強度及び広がりの中で充たすことを所与の主題が要求するところのものにみあう燃焼があるかどうかということである。対して「延長」とは、時間を含む概念であり、所与の主題が要求するだけの長い時間、その燃焼を持続させるかどうかということである。これらの用語を *Met.* 628 が規定している：

Habitus plura appercipiendi est ATTENTIONIS EXTENSIO, admodum clarius clarioribus etiam quaedam appercipiendi habitus est ATTENTIONIS INTENSIO. Habitus per longius tempus eidem attendendi est ATTENTIONIS PROTENSIO.

「より多くのものを統覚する持前が注目の外延であり、明瞭なものより更に明瞭に何かを統覚する持前が注目の内包である。同一のものに、より長い時間のあいだ注目する持前が注目の延長である。」

- (3) オウィディウス『哀歌』I. 1. 37—38, 41—42。
- (4) オウィディウス『恋のうた』I. 1. 1—4。
- (5) ホラーティウス『歌章』IV. 15. 1—4。

§ 156

「大壺が作られ始めたのに、どうして轆轤が回っているうちに水瓶が出てくるのか」⁽¹⁾

というはめに陥らぬよう、心の大いなる衝動をもって始めた計画を完成する為の時間の余裕は十分にあるか、又、それだけでなく、望ましい推敲のための時間の余裕が十分あるか？（第6節）けれどもこれが言えるのは、ひとが公衆に明示することを考えている才能の成果のみについてであり、即興的なもの（§ 96）にはあてはまらない。なぜなら、その場合、

「作品があまりに速成であるとか、配慮を欠いていると」⁽²⁾

非難されてもかまわないからである。ホラーティウスがルーキーリウスを非難するのはこの点である。

「おしゃべりで、しかも、書く労苦、正しく書く労苦をおこたっている。つまり、多作には何の価値も認められない……」⁽³⁾ (ホラーティウス『談論集』I. 4. 12)

(1) ホラーティウス『詩学』21—22。

(2) 同上 261。

(3) ホラーティウス『諷刺詩』I. 4. 12—13。

§ 157

§ 152—156の一般的説明の目的は、特に何を思惟すればよいかを君が知るようにということのみであり、そこから「怠ける口実に屈し」、そのときどきの悪条件を言いたてて、何も試みず自分を「甘やかす理由」⁽¹⁾を常に持つ、ということではない(クイーンティリアーヌス X.3)。全ての美的地平 (§ 120)、又は君の美的地平の下に位置するものを自分の主題として選択すると、コップの中に嵐を引きおこす⁽²⁾だけになってしまうだろう。全ての美的地平 (§ 121)、又は君の美的地平より上に位置するものを追い求めると、

「ダエダルスの技で蠟付けされた翼で、その名を澄んだ海原に与えようと努める」⁽³⁾

イーカルの二の舞いを演ずることになってしまうであろう (§ 150)。この両欠点を警戒せよ。「無限の躊躇で君の努力を欺かぬようにせよ。その躊躇は度を過ぎると、無為、怠惰の名、或いは臆病の名をも受けかねない。」⁽⁴⁾ (プリーニウス『第2書簡』10)

- (1) クィーンティリアーヌス X. 3. 29。
- (2) コップの中に嵐を引きおこす]
諺である。キケロー『法律について』III. 16. 36参照。
- (3) ホラーティウス『歌章』IV. 2. 2—4。
- (4) 小プリーニウス『書簡集』II. 10. 8。

第13節 絶対的な短さ

§ 158

事柄（第9節）と人格（第12節）の富が溢れているからといって、テレンティウスの作でのパンピルスのように：

「私より幸運で、愛の女神の恩寵に溢れた者がいようか」⁽¹⁾

と自分に喝采することがないようにせよ。この種の大きな富、及び思惟内容の豊かな材料から、君が自分で立てた目的のために何か完全なものを構成、合成しうるために必要なだけの数と量のものを、君の使用のために取り上げるべきである。私が要求するのは、論理学者が定義及び数理哲学的問題で要求する完全さではなく、何ら醜い欠如もなく、目的にとって不十分なものが何ら現象者とならず、悟性の力のみによるもの以外は、それに関連するものが何ら欠けていないような完全さである (§ 16)。それを達成したのが、**充実した完全なあり方の思惟**であろう。もとより、充実した思惟のあり方は、内容が盛り沢山で、豊かなものでもあるだろう。しかし、内容が一杯に詰まり、盛り沢山であっても、充実も完成もしていない思惟がいかなる事柄についてもありうる。この充実と完成は美的豊かさに属することである (§ 115)。

- (1) テレンティウス『義母』848。

§ 159

全ての点で同時に完成され、無欠であるように思われなければならない、又、美的なるものについての正当にして物識りの判定者に何かが欠けていると感じさせるならば、**思惟**は空虚で散慢であることになる。もし、健康な美になくってはならぬ何かを抜かすならば、いわば**不具のもの**、完全でなく、初心者のもつと見なされることになる。これに属するのは**隙間と断絶のある思惟の仕方**、美的には不当な跳躍に溢れるものである (§ 158、クイーンティリアーヌス、IV. 2⁽¹⁾)。

(1) クイーンティリアーヌス IV. 2]

cf. クイーンティリアーヌス IV. 2. 45:

Quare vitandast etiam illa Sallustiana... brevitast et abruptum sermonis genus.

「それ故、あの、サルルスティウス風の短さと、断絶のあるあり方の語法をも避けねばならない。」

§ 160

2) 美の健康な段階に全く無くともよいものは全て捨てねばならない。又、最初につかまえたものでも、邪魔物であれば、斥けねばならない。なぜなら、これら余分なものは、ひとの注意を散漫にすることによって害をなすからである (M. § 638)。これが、賞讃されるべき**絶対的短さ**である。なぜなら、

「醜い試みは短くあるように」⁽¹⁾ (ユウエナーリス)

というだけでなく、たとえ甘美な試みでもそうであるからである。けれどもこの短さは、この種の短い思惟を真に美しいものとして懐胎するために

用いられるべき時間とは関係を持っていない。

「1日が私の言葉よりも短いことがたびたびあった。」⁽²⁾ (オウィディウス)

だが、オウィディウスに賞讃すべき短さが無いと言う人がいたのだろうか。むしろそれが関係を持つのは、与えられた主題について与えられた仕方で——但し、無欠、完全に——思惟されるべき内容の多さ、少なさにであろう (§ 158)。時折、無用のことに

「短いが、しかし取り返しのつかぬ時間」⁽³⁾
が浪費される。これに対し、この賞讃すべき短さに据えられたとき、
「長い話にとってはしばしば時間が速くすぎ去るように思われた」⁽⁴⁾。

(1) ユウェナーリス VIII.165。

(2) オウィディウス『黒海よりの書簡』II.4.12。

(3) ウェルギリウス『アエネーイス』X.467。

(4) オウィディウス『黒海よりの書簡』II.4.11。

§ 161

キケロー『発見について』I.28にある、短い陳述の充実した記述は、§ 160の定義を説明するだろう。思惟が絶対的に、そして賞讃すべき仕方ですなわち、必要なところから始め、最後に反復をしないとき、その要点を語れば十分な物事の部分を語らないとき（つまり、何が生じたかを語れば十分で、どんな仕方ですなわち、生じたかを叙述しなくとも十分なことが往々にしてある）、知る必要があること以上に長く陳述（思念）「で続行しないとき、別の事柄に移らないとき、語られたことから語られなかったことが時折理解されるような仕方ですなわち、語られるとき、妨げとなるものだけでなく、妨げにも助けにもならないものも省かれるとき、そ

して、全てのものが一度に語られるとき、そして、直前に終えられた点から次に始めないとき、以上のようなときである」(クィーンティリアーヌスIV.2⁽¹⁾参照)。

(1) クィーンティリアーヌス IV.2]

すなわち、VI.2.40ff.

§ 162

およそ美しく思惟しようとする者は、「陳述において」だけでなく「どんなところでも、必要である (§ 158) と共に十分なだけの量 (§ 160) という中道を特に保たねばならない」。「喜びはひとを欺き、喜びを与えるものはさほど長く見えない。丁度、空間的には長くとも心地よく柔らかい行程は、硬く乾いた近道ほどひとを疲れさせないようなものである」⁽²⁾(クィーンティリアーヌスIV.2)。ウィルギリウスの『アエネーイス』第2巻の、800行あたりで

「トロイアの最後の苦しみを短く聞く」⁽³⁾
のは快い。

(1) クィーンティリアーヌス IV.2.45—46。

(2) クィーンティリアーヌス IV.2.46。

(3) ウェルギリウス『アエネーイス』II.11。

§ 163

従って、哲学者にとって適当であり、目的を達成していると言ってよい(M. § 882) 思惟のあり方、すなわち、不完全なもの (§ 159) も、余分なもの (§ 160) も何ら内包していないような思惟のあり方は、美しく思惟

しようとする者にとっても望ましいものである。但しそれは、理性類似者が豊富さの方は手に入れ、不完全さの方は避けることができる、という条件のもとにである (§ 15、16)。これと異なるのは次の場合であろう。

1) 「富を過当に喜ぶものがあるならば、アウフィドゥス⁽¹⁾の急流が川辺もろともひきさらっていくだろう。」⁽²⁾ (ホラーティウス)

「広大な渦の中でばらばらに泳ぐ者らが見える」⁽³⁾

とき、そういう者らには誰にでもこう叫んでやるがよい：

「君は一杯持っているからといって、それによって一層賢明であるわけではない」⁽⁴⁾。

他方、誰かの墓に、こう銘を刻み込んでやるがよい：

「短いだけに、それだけ安全な生涯を私は送った。大きさはそれだけで有害である」⁽⁵⁾。(クラウディアヌス⁽⁶⁾)

2) 或いは、§ 121、122、159で指摘した欠点に陥ったり、「無装飾で」「不器用な短さになる」⁽⁷⁾とき (§ 108、クィーンティリアヌスIV. 2)。

(1) アウフィドゥス] (Aufidus)

急流で名高い、アプーリアの川。

(2) ホラーティウス『諷刺詩』I. 1. 57—58。

(3) ウェルギリウス『アエネーイス』I. 118。

(4) ホラーティウス『書簡詩』II. 2. 153—154。

(5) 出典不明。

(6) クラウディアヌス] Claudius Claudianus

4～5世紀のローマ詩人。

(7) クィーンティリアヌス IV. 2. 46。

§ 164

全体の美が許す量だけの美が美しい思惟のあらゆる部分に与えられるた

めには (§ 19)、絶対的短さ (§ 160) は美的儉約と節制を要請する (E. § 289、260)。「儉約とは、無用の消費を避ける学、又は、家産」(第8—12節で述べた富)「を節度を以て用いる技術である。それなのに、われわれは小さく、吝嗇な心の持主 (§ 120、149) をきわめて控え目な人と呼んでいる。」(控え目な人が守る)「節度と狭さとの間には無限の差異があるにもかかわらずである」⁽¹⁾ (§ 23、M. § 551) (セネカ『恩恵について』II. 34)。君が「クラスス」のように「優雅な者のうちで最も控え目」でありたいにせよ、「スカエウォラ」のように「控え目な者のうちで最も優雅」(キケロー『ブルトウス』148)でありたいにせよ、充実した、完全なあり方の思惟において (§ 158)、

「要るだけのものを、控え目な手で」⁽²⁾

示すときに、君は教養ある趣味を常に満足させるだろう (§ 160、162)。

(1) セネカ『恩恵について』II. 34. 4。

(2) ホラーティウス『歌章』III. 16. 44。

§ 165

一般に絶対的短さは、われわれ哲学者があまりに丁寧な思惟のあり方と呼ぶものを警戒するであろう (§ 160)。他方、優雅さのもつ儉約は、特に「重い穂のために茎が垂れ下がらぬように (§ 164)、余分の作物を若葉のうちに餌に食ませるであろう (§ 158)」⁽¹⁾。

「なぜなら、もし余分な葉で日陰が一杯になるならば、もみがただけ沢山ついた茎を打穀場は空しく脱穀することになるうから」⁽²⁾ (ウィルギリウス『農耕歌』I. 191)。

華美なあり方の思惟、又は装飾とは、(1)全体の淑やかな美が耐えるより多くの美と文彩 (§ 26) とを、思念の系全体にわたって殆ど一つ一つの小部

分ごとに押し込むもの、又は、(2)少なくとも或る一つの部分を、全体の美しい雅致が許す以上の装飾を以て形成するものである。美しく思惟しようとする者が、このうち(1)の華美を持つと、ペトロニウスが「言動全てに、いわば芥子の実、胡麻の実がふりかけられている」⁽³⁾と呼んだ者になるが、この種の華美には賢人の次の言葉があてはまろう：

「半分の方が全部よりよい」⁽⁴⁾。

又、(1)と(2)両方について次のことがあてはまろう：

「奴隷よ、われはペルシアの華美を憎む」⁽⁵⁾。

(1) ウェルギリウス『農耕歌』I. 111—112。

(2) 同上 I. 191—192。

(3) ペトロニウス 1。なお、原文脈では、これは、学校での弁論教育が、日常的実践から遊離した空虚なことに関わっていることを揶揄した言葉である。

(4) ヘシオドス『仕事と日々』40。

(5) ホラティウス『歌章』I. 38。

§ 166

美しく思惟することのあり方全てに相応しい短さ (§ 160) とは、あの充実し、内容が一杯に詰まったもので (§ 158)、不具でなく、隙間のあるものでなく (§ 150)、しかし控え目で、節制があり (§ 164)、装飾過多でも、欠点を持つものでもないもの (§ 165) であるが、これを円やかな短さという一つの名で呼ぶのがよからう。従って、それがいかに大きなものであれ、君の材料の (第 8、12 節) 溝や裂け目を充填するがよい (§ 158、159)。しかし又、

「装飾過多になるのは抑制しつつ」⁽¹⁾ (§ 165)、

そして又、賞讃すべき短さと儉約の規則にてらして全てを雅やかに円くしつつ (§ 160—164)、美的でなく (§ 115)

「不快な豊かさを捨てよ」⁽²⁾。

(1) ホラーティウス『書簡詩』Ⅱ. 2. 122。

(2) ホラーティウス『歌章』Ⅲ. 29. 9。

第14節 相対的短さ

§ 167

美的豊かさには絶対的なものと相対的なものがあったが (§ 116)、それと同様、賞讃されるべき円やかな絶対的短さ（これについては第13節で述べた）から**相対的短さ**を区別すべきである。これは、絶対的短さ (§ 160) のかなり重要な一段階であり、当面思惟されるべきいくつかのものにきちんと必要であり、特有であるものである。この短さは、又この意味での短い思惟を懐胎するのに使われる時間にも或る種の相関関係を持っている (§ 160)。プリーニウスがキケローの弁論について考えていること——「最も大きな弁論が最もよい」——、或いは、あまり厳密でなしにつけ加えていること——「よい本は、大きければなおよい」⁽¹⁾（『第1書簡』20）——は、相対的短さを要請する思念にはあてはまらない。因みに、プリーニウスのこの書簡は、全体が美学的論争——ここに関連するもの、及び、絶対的短さと相対的短さの区別に関する他の論点において取り上げられるべきもの——を含んでいるが、論争に勝っているのはプリーニウスの方である。

(1) 小プリーニウス『書簡集』Ⅰ. 20. 4。

§ 168

美しい思惟内容のうちで、相対的短さを要請するあり方を定義するときには、多くの論争が生まれた (§ 167)。つまり、一方の人々は、しかじかのあり方においては、1) 相対的短さから十分に区別されぬ絶対的短さがとりわけ必要であると判断した (§ 160, 166)。2) このあり方に含まれつつも、同時に相対的短さをも特に要請するという特殊な場合がかなり多く生じた。3) 多くの人々においては、相対的短さも又、場合を問わず一般に好ましいものとして認められた。これに対し、もう一方の人々は、1) 前述の人々と同じく、絶対的短さと相対的短さとを判明に識別することをせず、しかじかのあり方の主題には一般に短さを認めるべきではないと考えた。なぜなら、2) 「印象づけ、心に刻み込み、反復をすべきことなのに、さっと」(相対的に)「短く触れるだけでは怠慢である」⁽¹⁾のような場合が、このようなあり方には含まれていたからである。3) このようなあり方の主題において、常に専ら(相対的)「短さを好むのは、怠け者のみであり、そういった者らの怠惰な嗜好を、まるで判断であるかのように顧みるのは笑止であろう。なぜなら、君がもしその者らの言い分を考慮するなら」、(相対的に)「短く語るどころか、そもそも何も語らぬ方がよいことになってしまうから」⁽²⁾。

(1) 小プリーニウス『書簡集』I. 20. 2。

(2) 同 上 I. 20. 23。

§ 169

数学と呼ばれるこの自然的方法は、このような論争 (§ 168) の決着をつけるのに十分な原理を目下の論述の前に置くことをいまだ許していないの

であるから、いくつかの論争のみを、例として見るだけにしよう。I.
「裁判を行なう際に、短さほど好ましいものは何もないか？」これは、先に引用したプリーニウスの箇所での問題である。現在のわれわれは、演壇から行なわれる説教についての類似の問題を付け加えることができよう。答え——絶対的短さ (§ 160) は、それが円やかなもの (§ 166) であるならば、法廷弁論、説教双方の最初の資質の一つである。しかし主要なものではなく、或る場合には全体にわたって、又、他の場合には或る部分において相対的短さ (§ 167) を要請するものである。しかし、この相対的短さがすべてのものにおいて貫徹されることはありえないし、ましてや、すべてのものの個々の部分において貫徹されることは一層ありえない。それは、気難しい批評家はともかくも、厳格な批評家ですら賞讃するもの、最も快いものとして評価するもの、そういうものからは遠く離れているのである。

§ 170

II. 陳述⁽¹⁾は短くなければならないか？ 既に「アリストテレースは、イソクラテースと考えを異にし、陳述は長いか短いか必然的に決まっています、その中間をいくことは許されぬかのごとくに、その短さの規則を嘲笑している。テオドロス⁽²⁾の学派も、短く陳述することは必ずしもどこでも有効であるわけではないし、また、明晰に陳述することは、必ずしも常に有効ではないから」⁽³⁾ (クィーンティリアーヌス IV. 2)、短くある必要はないと言っている。キケローはイソクラテースと考えが同じであり、

「そしていまだ係争中である」⁽⁴⁾。

絶対的短さが、他のいくつかの弁論部分よりも大きな相対的短さをかなり多くの陳述において要求するのは確かである (§ 160, 167)。さて、相対的短さにもいくつかの段階がある (§ 167)。クィーンティリアーヌスが、先

に引用した箇所で陳述の短さを弁論家に勧めているのは正しい。しかし彼はまたこうも言っている：「あのサルスティウス流の短さは、サルスティウス本人においては長所に数えられるとはいえ、やはり避けねばならない。また、断絶のあるあり方の語法は、ゆっくりと時間をかけて読むときにはあまり見落すこともなかろうが、聞くときには頭の上を飛びこしてしまい、繰り返されるまで待つこともないから、やはり避けねばならない」。

(1) 陳述]

「陳述」(narratio)とは、古代修辞学において弁論をいくつかの部分に分けた場合、序に続く第2の部分であり、証明したい事柄を提示する目的を持つ。

(2) テオドロス] Theodorus

ガダラ (Gadara) 出身、前1世紀の修辞学者

(3) クィンティリアヌス IV. 2. 32。

(4) ホラーティウス『詩学』78。

(5) クィンティリアヌス IV. 2. 45。

§ 171

キケローは、短い陳述について述べる折に、洒落た、かなりよく起こる誤りに触れてこう言っている：(相対的)「短さの模倣は多くの人々を欺いた。その結果、自分では短いと思っていたながら、実際は最も長いのである。なぜなら、少しのこと、必要なだけのことを語ろうと努めず、多くのことを短く語ろうと努めているからである」(『発見について』I. 28)。彼はそこで実例を挙げているが、同様の例はクィンティリアヌスの先述の箇所にもある。絶対的短さを無視して相対的短さに努力することを、私のとらえ方では、**最も長い擬似短さ**と呼ぶことにしたい。これは、言葉を醜くするだけではない(最も長い擬似ラコニズム)。

§ 172

しかしながらキケローは、陳述における相対的短さを必ずしも是認しない人々の意見のうちにも真理を見ていた。そのことを示しているのは『弁論家について』Ⅲ. 202である。そこでキケローは時には「一つのこと」に長長と留まること（これはきわめて大きな効果を上げる）、明証度の高い説明、その場で実際に行なわれているかの如く物事を生き生きと描写すること（これは、物事を提示する際にも (§ 170)、また、提示されるものを輝かしくしたり、豊かにしたりする際にも最も大きな力を持つので、われわれが大きくしてみせるものを聞く人は、弁論が大きくなしうる限りの大きさをそれは実際に持っていると考えるのである (§ 116))」を用いることを勧めているが、時にはまた「突然中断すること」（相対的短さ）、「及び、語ったことより多くのことを了解させる仄めかし、及び、明瞭に切りつめられた短さ、及び、小さくすること等」をも勧めている。このいずれも内容の文彩 (§ 26) に数え入れている。

§ 173

何人かのギリシア人は「切りつめられた説明、すなわち簡約（シュントモン）」⁽¹⁾と「短い説明」とを区別し、「前者は、無用のものを持たぬもの」、すなわち真に絶対的に短いもの (§ 160) であり、後者は「必要なもののうち何かが欠けているようなもの」として定義されるとしているが、私はこの区別に関わるつもりはない。なぜなら、字句にこだわることに喜びをおぼえるのでない限り、後者は欠点であり (§ 158, 159)、長所である短さ (§ 160, 167) の名に決して値するものではないからである（クィーンティリアヌスの、先に引用した箇所）。これに対し、判明に推論することの切りつめられたあり方、つまり簡約（シュントモン）と、美的主体の円や

かで (§ 166)、しかも相対的な (§ 167) 短さとの区別は私は喜んで認めよう (§ 121、122)。

(1) クィーンティリアヌス IV. 2. 42。以下の引用部分も同じ。

§ 174

Ⅲ. 思考内容においては相対的短さが要求されるという点では、批評家のかなりの部分が一致している。

「君が何を勧告するにせよ、短くするように。すばやく語られた言葉を精神は素直に理解し、忠実に守るであろう。一杯になった心からは、余分なものは全て流れ出してしまう」⁽¹⁾ (ホラーティウス『詩学』335)。

「内容が流れるためには、そして、疲れた耳を圧迫する言葉に巻き込まれぬためには、短さが必要である」⁽²⁾ (『談論集』I. 10. 9—10)。

「内容における短さは、元老院議員のみならず、弁論家の大きな長所でもある」(キケロー『法律について』Ⅲ. 40)。確かにキケローより「既に何世紀も前のシラクサのピリストスや、あのトゥーキューディデースにさえ信奉者が欠けていたが、その理由は、彼らの内容が短く切詰められていて (§ 121、122)、しかも時には短さとあまりの鋭さの故に十分には明瞭でないこともあったので、テオポンポスの陰に隠されてしまったのである」(キケロー『ブルートゥス』66)。しかしながら、後世が好意を持ち、運命が彼らの書物を保存したことによって、トゥーキューディデースもタキトゥス自身も少なからぬ信奉者を獲得した。これに対し、他のものらは

「香草と香料と胡椒、そして反故に包まれたものを何でも売捌く通りへ運びおろされる」⁽²⁾。

もっとも、最後に引いたキケローの注意は、思考内容における相対的短さにも限度があることを示しているのであろう (§ 170)。

- (1) ホラーティウス『詩学』335—337。
 (2) ホラーティウス『書簡詩』II. 1. 269—270。

§ 175

IV. 「機智においては短さは一層鋭く、迅速である」⁽¹⁾ (クィーンティリアーヌスVI. 4)。クィーンティリアーヌスは続く部分で、マルスス⁽²⁾による機智の定義を引く：「機智とは、短い言い回しの形に凝縮された或る種の長所であって、物事や人物がそれぞれ要求するのに応じて抵抗したり挑発したりするのに最も適している」。そしてこう付け加える：「この定義から短さという限定条件を取り除けば、言葉の全ての長所を包括してしまうことになる。マルススがなぜ短さを求めたのかはわからない」⁽³⁾ ……
 「しかし、きわめて教養のあるマルススの判断を私は斥ける気はない」⁽⁴⁾。
 クィーンティリアーヌスはマルススの判断を立証している。そしてホラーティウスが

「時として機智を持ち、力を抑え、態と力のないふりを、する者の」⁽⁵⁾

(§ 164, 172) (ホラーティウス『談論集』I. 10)

語法を要求するときには、その理由をも同時に暗示しているように思われる。

(1) クィーンティリアーヌス VI. 3. 45。

(2) マルスス] Domitius Marsus

アウグストゥス帝時代の諷刺詩人。機智に関する著作も書いたとされている
 (クィーンティリアーヌス VI. 3. 102参照)。

(3) クィーンティリアーヌス VI. 3. 104。

(4) 同上 VI. 3. 108。

(5) ホラーティウス『諷刺詩』I. 10. 13—14。

§ 176

要約：財を準備せよ（第8節）、その財はどこから求めればよい（第9節）、汝がどこから選びとるか私はあまり注意を払うつもりはない（第10節）。汝は一人で準備せよ（第11節）。どうぞ（第12節）、準備した財を円やかな短さをもって示して下さい（第13節）。このあとで述べられるべき美（§ 22）を忘れぬ汝の思念は

「長く（§ 116）しかも短い（第14節）ものであり、私の願いに合致することになる」（オウィディウス）。

第15節 美的大きさ

§ 177

物事を麗しく思惟するときの第2の注意点は（§ 115）**大きさ**（M. § 515⁽¹⁾）である。但しこの大きさは**美的大きさ**でなければならない。われわれはこの**美的大きさ**という名で、1）対象（§ 18）の重さと重要性（M. § 166）、2）対象に釣り合った思惟の重々しさ、3）これら双方の多産さ（M. 166⁽²⁾）を包括することにしよう（§ 22）。「われわれが何度も思惟、考察せねばならないもの、精神がそれを忘却することは殆どないか、全くないもの、確固とした、強い、消されることのない記憶にとどめられるもの、それが偉大なものである」⁽³⁾（ロンギーノス 第6章）。

(1) M. § 515]

Gradus COGNITIONIS, quo plura cognoscit, est eius VERTAS (copia, extensio, divitiae, vastitas), quo pauciora, ANGVSTIA, quo maiora, est DIGNITAS (nobilitas, magnitudo, grauitas, maiestas), quo minora, VILITAS (exilitas, leuitas).

「より多くを認識する段階の認識が豊かさ（豊麗さ、外延、富、広大さ）であり、より少なくを認識する段階が狭さであり、より大きなものを認識する段階が品位（雄大さ、大きさ、荘重さ、威厳）であり、より小さなものを認識する段階が卑しさ（浅薄さ、軽薄さ）である。」

(2) M. § 166]

Magnitudo rationis ex numero rationatorum est FOECVNDRITAS, ex magnitudine eorum PONDVS (gravitas, dignitas, nobilitas).

「原因から生じたもの（結果）の数の点での原因の大きさは多産さであり、結果の大きさの点での原因の大きさは重さ（荘重さ、品位、雄大さ）である。」

(3) ロンギーノス VII. 3。

§ 178

「天性と、より神に近い心と、偉大なること (§ 177) を語る口とを持つ者に、詩人という名の誉れを汝は与うべし」⁽¹⁾。

だから、ひとがもし偉大なことを歌うなら詩人と呼び、音楽家と呼ぶがよい。そしてもし偉大なるものを描くなら、画家と呼ぶがよい。「書物そのものも、大きければ或る種の権威と美がつけ加わる」⁽²⁾（プリーニウス 第1書簡20）。さてわれわれは先ず、豊かさと同様美的大きさをも絶対的の大きさと相対的、比較的な大きさとに分けることにしよう。前者は美しく思惟すること全てに必要なもの、後者は絶対的の大きさの一段階であり、美しく思惟されるべきもののいくつかに特に要求されるものである。

「もし或る人が、節約の厳格なる法則によって性格を理解する」と同時に「厳格な技術の成果を」希求し「心を大いなるものに向けるならば」⁽³⁾（ペトロニウス）

この両種の大きさをいずれも知り、正しく区別するようにせよ。

(1) ホラーティウス『諷刺詩』I. 4. 43。

(2) 小プリーニウス『書簡集』I.20.5。

(3) ペトローニウス 5。

§ 179

実際には美しく思惟している人々が、相対的な広さ (§ 116) を追い求めず、ましてや、ひきのばされ、拡散し、華美にみちあふれたあり方の思惟にとりかかろうと努力することなどはしない (§ 165) ときには、貧しさ (§ 120) の点で自分自身を責めることがある。しかしこれは幾分エローネイア的な謙遜 (§ 175) をしているのである。こういう人々は又同じ理由から、崇高なことは思惟せず、まして膨脹するのは好きでないのだが、自分のことを小心者と呼ぶことがある。しかし読者にそれを信じてもらう気はないのである。ホラーティウスはこう言っている：

「神々はうまいことに私を貧しく小心な者にかたちづくった。だから私は稀に、それも極く少ししか語らない。一方君はといえば、山羊皮の鞆にとじ込められた空気のように……」⁽¹⁾。

またマルティアーリス (IX. 50) はこう言っている：

「ガウルスよ、短さによってひとを喜ばせる (§ 177) 詩を私が作るが故に私の本性はかくも小さい (第14節) のだと君は証明する。確かにそうだ。しかし、12巻の書でプリアムスの戦争を壮大に語る君は偉大な人間なのか」⁽²⁾。

(1) ホラーティウス『諷刺詩』I. 4. 17—19。

(2) マルティアーリス IX. 50. 1—4。

§ 180

相対的、比較的な美的大きさは多くの段階を持つが (§ 178)、今はそれ

を、美学者にふさわしく、文法家がよく用いる3つの段階のみに分けることにしよう。すなわち、絶対的に大きなものは、原級か比較級か最上級に存するということにしよう。第1のものは「低い樺柳の木」、第2のものは「灌木」、「第3は森」でなければならない。

「灌木と低い樺柳の木が万人を喜ばせるわけではない。もし私が森を歌うなら、その森は執政官に相応しいものでなければならない」⁽¹⁾（ウィルギリウス）。

(1) ウェルギリウス『詩選』IV.2-3。

§ 181

美的大きさは、絶対的なもの (§ 178) も、相対的なもの (§ 180) も、自然的と道徳的とに分かれる。前者は自由と直接の連関を持たないもの、後者は自由とかなり密接に連関する限りで対象と思维とに認められるべきものである。自然的大きさの例としては、ウィルギリウス『アエネーイス』V.421がある。

「エンテルス⁽¹⁾は二重の上着を肩から投げ捨て、大きなつくりの四肢と、大きな骨と両腕をむき出しにし、闘技場の中央に仁王立ちする」⁽²⁾。
美的地平内部で構成された主題（第9節）は豊かに（第8節）思惟されねばならない。それはトポス（第10節）及び豊かにする論証（第11節）によってである。それらを用いることを心得ているなら、これらの主題は同時に大きさをも持つであろう。この大きさは、絶対的で自然的なものである (§ 177)。従って、これには新しい規則はあまり必要でない。

(1) エンテルス] Entellus
シケリアの英雄。

(2) ウェルギリウス『アエネーイス』V. 421—423。

§ 182

道徳的美的大きさ、すなわち自由を介して道徳法則と一致して規定された可能な大きさ (§ 181) を私は次のようにとらえる。1) 対象及び対象の様々の要素、帰結における大きさとは、消極的には、それらが徳を毀損することなしに一層多くのものによって、しかも優雅に思惟されうる場合である。2) やはり対象及びその様々の要素、帰結における大きさであるが、それが積極的に生ずるのは、遅かれ早かれ結局は徳に調和するものが上述の仕方では思惟されうる場合である。3) 他方、思惟における大きさは、消極的には、思惟がその対象と素材とに釣り合い、^{そうおう}相応し、その際、徳とよい性格とを最も増進する最も美しい事柄とが何の損失をも受けることがない場合である。4) 積極的に、かかる事柄が少なからぬ利得を結局は手に入れる場合である (§ 177)。この道徳的美的大きさを短く美的品位と呼んでよからう。そして、もう § 115 の引用文に続けて

「何が相応しいか、何が相応しくないか、徳がどこに通ずるか、誤りがどこに通ずるか」⁽¹⁾

を知るのがよからう。

(1) ホラーティウス『詩学』307。

§ 183

いわば別の類へ移行することによって、そして丁度他人の収穫へ鎌が入られるように、幸福な生活の一層厳格で一層上位の法則や、真正のキリスト教の最も神聖な言葉のみから思惟のこの麗しさが導き出されることを

私は望まない。私はむしろ次のように考えたい——この美は、真に美しい天性の作品の不可欠の条件である。この条件を全く欠くならば、単に靈魂、理性に対してだけでなく (§ 15)、経験 (§ 50) と学問 (§ 63) とによって強化された生得的な心の大きさ (§ 45) に支えられた理性類似者自体に対しても、或る種の醜が現われてくるだろう。この醜は、その洗練のゆえにかえって他のいくつかのものを醜くする。なぜなら、徳性を害することなしにそれらのものにとどまることは許されぬからである。このことが生ずるのは、確かに好ましからざる逸脱 (§ 25) によるか、または、徳性を測るのに、平凡で低俗なものではないにせよ趣味のみを以てする者の恣意によるか (§ 35) いずれかである——かように私は考えたい。

§ 184

カトゥルスは第16歌で、彼と考えを異にする人々を、次のように語ることによって最も醜い罰でもって脅しているけれども、しかし彼が誤り、それも醜い誤りを犯していることは、ここまでの内容からして明らかであろう：

「敬虔な詩人本人は純潔であることがふさわしい。しかし詩はその必要はない。詩は肉感的で、あまり慎みを持たず、放蕩なものを興奮させることができ、はじめて洒落た味と魅力とを持つ。」⁽¹⁾

マルティアーリス（等1巻35）が

「戯れの詩にはこのような法が与えられている——猥褻でなければ喜びを与えることはできない」⁽²⁾

と言っているのは、やはり誤りであるが、しかし彼は

「貴婦人のような恥じらいを娼婦に付与したのは誰か」⁽³⁾ (§ 165)

と言って、ふさわしい仕方て自由の法を証明することによって、小皿にふさわしい小蓋を見つけ出している⁽⁴⁾。ペルシウスは『諷刺詩』Iで、形式

が誤っている点を除けば、一層正しくこう言っている：

「歌が腰にはいり、ふるえる詩に中のがくすぐられると、ローマの名門たるティトゥスの族の大男らが見苦しい格好をし、濁った声を出して身を震わせるのを君は目にするだろう」⁽⁵⁾。

- (1) カトゥルス XVI. 5—8。
- (2) マルティアーリス I. 35. 10—11。
- (3) 同上 I. 35. 8—9。
- (4) 小皿にふさわしい小蓋を見つけ出している] (*dignum... patella reperit operculum*)
日本語の「われ鍋にとじ蓋」に一寸似ているが、もっと一般的に、相応しいもの同士を合わせる、という趣意の諺である。ヒエロニモス『書簡』7, 5参照：*Accessit huic patellae, iuxta tritum populi sermone proverbiam, dignum operculum.* (「下世話によく使われる諺の言い方を借りれば、彼はこの小皿にふさわしい小蓋を捜し出してくる。」)。
- (5) ペルシウス『諷刺詩』I. 19—21。

§ 185

美的品位 (§ 182) は美的大きさの部分であり、種であるが、後者と同じく (§ 177, 178) 絶対的と相対的に分かれよう。絶対的美的品位とは、美しく思惟すること全てに必要なものである。これについては、われわれはローマの法学者を真似て、何でもあれそれを一層頻繁に思惟することが良風美俗に対立することになるようなものには、思惟によってすらとどまることはできないと考えることにしよう (§ 183, 184)。他方相対的美的品位は、美しく思惟されるべきもののいくつかに特に要求されるもので、必ずしもあらゆるものに同じ程度にあるものではない (§ 178)。自分の「書法が軽すぎて、最もすぐれた人々の人格にはあまり相応しくないと判断するような人々が多くいることを疑わない」⁽¹⁾とコルネーリウスが言うとき、

彼はこの相対的美的品位について語っているのである。またキケローは、『善と悪の極限について』第1巻でこう語っている：「この種の書き方（哲学者らがギリシアの用語で論じたものを、ラテン語に訳すもの）は、たとえ洗練されたものであっても、人格と品位には相応しくないという人々もいるだろうと思った」⁽²⁾。

(1) ネボース pr.1。

(2) キケロー『善と悪の極限について』I.1-2。

§ 186

キケローが『義務について』I.130で次のように決めるときも、やはり相対的美的品位のみについて語っているものと理解せねばならない：「美には2種類ある。その一方には優美さが、他方には品位が存する。優美は女性的、品位は男性的である」。なぜなら、キケロー自身、完全な弁論家の「表情」において「品位だけでなく優美をももたらす」よう要請しているし（『弁論家』60）、『友人宛書簡』X.6では、品位に優美でなく「醜」⁽¹⁾を対立させているからである。確かに、婦人にもそれなりの品位があるのであって、ウルピアーヌス⁽²⁾は法律家にふさわしく（§ 15）一層正確に「男性には、より多くの品位がある」⁽³⁾と言っている。しかし、キケローの同意と助成とを得て、たとえ絶対的なものであれ品位を全く欠くものは全て醜い、と言うことは許されるであろう。そして真の美、特に例えば行為の美など男性的な美においては、優美に加えて特に品位を要請してよからう（『弁論家について』I.142）。そして事柄と人柄は「その品位が奪い取られることによって醜くなる」（『カエリウス弁護』3）と考えてよからう。

(1) キケロー『友人宛書簡』X.6.3。

(2) ウルピアーヌス] Domitius Ulpianus, 170頃—228。

ローマの法学者。280にもものぼる著作があり、のちの『学説彙纂』の中心的資料の1つである。

(3) 『学説彙纂』(*Digesta*) I.9.1。

§ 187

美しく思惟されるべきものの美のために私が特に選び出すのはドイツの品位であることを、かなり大胆に認めるに吝かではない (§ 186)。私は専らドイツ人のために書いているからである。なぜなら、ドイツ民族がローマ人に著しく似ている点はいくつかあるが、キケローが『ムレナ弁護』23の次の箇所ですべている長所も両国民に共通であることを、私は経験で知っているからである。「ローマ人」(ドイツ人)「の好意をわれわれの手に入れさせるような学藝は、全て讃仰すべき品位ときわめて快い有用性とを持っていなければならない。」われわれの美的技術は、絶対的品位を一般的に、且つ強く勧めているし、また、相対的品位をも一層はっきりと眼前に据えるものであるが、その技術自体も絶対的品位を持つものであろうし、それだけでなく、市民のうちの、苛酷ではないが有力な判定者は、或る種の相対的品位をもそれに認めることであらう (§ 185)。

§ 188

しかしながら、私の考えが誤っていないならば、§ 182の1番と3番、すなわち消極的なあり方の美的品位の方は進んで認めるのに対し、2番と4番では、美しい思惟がなされるときに、正当にして美しいものにとって必要である以上に厳重なものを常に要するようなものが要請されている、そう判断するような人々がドイツの市民らのうちにもいるであろう。しかし、そういう人々に対しては、次のような仕方をとれば、かなり容易に私

は弁明できるであろう。1) そういう人々は、2つのものをかなり注意深く区別することを学ぶがよい。その2つとは、無言、暗黙のうちに、長い時間をかけて、きわめて間接的に、比較的小さな徳性の規則にいくらか寄与するものと、明確、明白な忠告とである。2) 美しい認識の主要な特質である生命 (§ 22) を一層しっかりと検査し、いかに多様な仕方と程度においてそれが見事に現われるのが常であるかみるがよい。しかしここでは (§ 169)、自分のことを

「エピクーロスの群の中にいる豚」⁽¹⁾

つまり大食漢であると言う者と同じ又はそれ以下を、徳性と正しさの学科の点で私が要求したとしても、私が咎められることはありえない、と言うことによって私は自己を弁護しよう。ホラーティウスは詩人一般について再三再四それを主張している。例えば次の箇所がそうである。

「詩人は有益であることと、喜ばせることの2つを目ざす。そして、快適であると同時に生活に相応しいことを語ろうとする。読む者に喜びと忠告とを等しく与えることによって、快に有用性を混ぜ合わせる者は満票を得るだろう。」⁽²⁾

(1) ホラーティウス『書簡詩』I.4.16。

(2) ホラーティウス『詩学』333—334、343—344。ただし、この詩句の前半のホラーティウスの原文は「詩人は有益であることか、喜ばせることか、或いは、同時に快適であり、生活に相応しくもあることを語ろうとする」であるから、かなりの変更がバウムガルテンによって施されていることになる。

§ 189

美的大きさ (§ 177) と品位 (§ 182) とは絶対的と相対的に分けられたが (§ 178、185)、また客観的 (物事、素材の) 大きさと主観的 (人格の) 大きさとに分けられよう。客観的大きさとは、大きさと品位の点で釣

り合いのとれたものが美しい天性と心とによって（第2節）色づけられる原因が、主として客体と思维内容自体に存する場合である。主観的大きさとは、欲求と決断とによって与えられた素材を、可能な限り、そして許される限り、大きさと品位とにおいて美しく眼前に据える一定の人間の物理的可能性、能力のことである。それはたとえ限定的、仮設的にそのようなものであってもさしつかえない。このうち後者（主観的大きさ）を美的大きさと莊重さと呼ぶことにしよう（E. § 489）。

§ 190

それを記述すべく一瞥しただけで、直ちに或る種的美を伴ってわれわれの眼に描き出されてくるような物事、素材がある。かつてウィルギリウスの眼に描き出されたのもそれであった：

「より大きな世界秩序が私には生まれる。より大きな作品を私は試みる」⁽¹⁾（『アエネーイス』VII. 44）。

ウィルギリウスは、彼の生存中に再興するであろう黄金時代について次のように予言しているが、そのことを、自分の力を正しく測りつつ、自分が美しく作品化すべきかかる主題について予言しうような者は幸いである：

「トラキアのオルフェウスも、リノス⁽²⁾も私を詩で負かすわけにはいくまい。確かに1方には母親が、他方には父親が、つまりオルフェウスにはカッリオペーが、リノスには美しいアポロローンがついてはいるが。パーンの神ですら、アルカディアを審判として私と競うなら、パーンですら、アルカディアを審判として自分の負けだと言うであろう」⁽³⁾（§ 189）。

（1） ウェルギリウス『アエネーイス』VII. 44—45。

(2) リノス] Linos

アポルローンとテルプシコラー（合唱隊抒情詩と踊りのムーサ）の子、オルフェウスとヘルクレースの師。

(3) ウェルギリウス『詩選』IV. 55—59。

第16節 素材の絶対的大きさ

§ 191

素材の絶対的美的大きさ (§ 189) は、美的人間の地平内部で構成されたときに (§ 119, 127) 全く大きさを欠く (§ 177) 対象や素材、すなわち、**真にそのような些事**（最も低い、つまらぬ物事、がらくた、くだらないもの）を、思念しようとする人が思惟対象、主題として選び取らぬよう要請する。「私は些事を歌う詩人を聞く気はない」⁽¹⁾（キケロー『ストア派のパラドックス』3）。それ故、ペルシウス（『諷刺詩』V. 19）が次のように言うのは全く正しい：

「煙に重みを与えるのがせいぜいの仰々しい些事で私のページをふくらませる仕事に熱中するのはごめんだ」⁽²⁾ (§ 182)。

(1) キケロー『ストア派のパラドックス』III. 26。

(2) ペルシウス『諷刺詩』V. 19—20。

§ 192

「もし或る人が山羊の毛、つまりくだらぬことについて争論し、些事のために武器をとって戦うならば」⁽¹⁾、自分の言い抜けを美的地平をこえて持ち上げようとするのでない限りは (§121)、論争の素材はこのこと (§ 191) に関連している。カトウルスと

マルティアーリスが、§ 184で述べた恥すべき法則に従って書いた自分の思惟内容を些事と呼ぶとき、彼らはそれに対してあまりに寛容すぎる。しかしながら、彼らが一層美しく懐胎したものを同じ些事という装いで包むときには、§ 179で述べられたエイローネシアとして解釈せねばならない。実際には些事でないものが些事と見なされることがしばしばある。例えば§ 100の場合がそれである。また、「誰1人足もとを見ずに天界を眺めている」というデモクリトスの考えも、正しく理解されればそれに属するだろう。キケローは『占いについて』II. 20でそれを誤って攻撃し、大きな些事に入れているが、それは、「自然哲学者ほど傲慢なものは何1つ」ないという言葉と同様、正しい見方ではない。

(1) ホラーティウス『書簡詩』I. 18. 15—16。

§ 193

美的品位 (§ 182) には絶対的、相対的 (§ 185)、及び客観的、主観的の別があるが、また別の区別の仕方がある。すなわち、§ 182の第1と第3の条件がそれに認められる限りで消極的、また、第2と第4の条件も同時に観察される限りで積極的とこれからは呼んでよかろう。そしてわれわれは既に美的エートスの高貴な部分に着手しているのであるから、何よりも先ず道徳的可能性の研究を介して (M. § 723)、美的な性向ないし美的なものに認められた性向として一般的に美的エートスを定義することにしよう。この定義は少くとも心理学者らには明白である。「少なくとも私の思うところ、ローマの言葉はエートスに当たる語を欠いている。それは性格(mores)と呼ばれている……しかし事の実際を観ると、性格よりも、むしろ性格の或る特性をそれは指すように私には思われる」⁽¹⁾ (クイーンティリアーヌス VI. 3)。

(1) クィーンティリアーヌス VI. 2. 8—9。

美的エートスもまた、消極的と言われる種類、部分 (§ 193, 182) と、積極的と呼ばれる種類、部分を持つ。前者の定式はこうである：物事、順序、及び、例えば措辞などの表示形式 (§ 13) が美しいものとして志向されている場合に、道徳的に不適当なものがそれらのうちに理性類似者に対して現われることがないような仕方、それらが整備される (§ 16, 22)。積極的美的エートスは、今述べたものどもが更に徳性と調和、一致し、経験、習慣から道徳的、倫理的、経済的、政治的になされうるものと美しく和合していることが、それによって現象者となったり、理性類似者に観察可能なものとなったりするところのものである (§ 23)。

§ 195

われわれはエートスの部分のうちで、先ず第1に、自然的なあり方の思念が与えるであろうものに向かおう (§ 194)。もし絶対的なそれのみを理解するならば (§ 182, 185)、美的品位の要請するのは、美的地平内部でそれが構成され、豊かさ、生動性等々を以て (§ 22) 把握されねばならぬ場合に、全ての品位を全く欠くような思惟対象を選んだり、ましてそういう主題を選んだりせぬように、ということである。これらの思惟対象、主題は下劣で平民的な対象である。それらは樗柳よりもむしろ泥土に (§ 178) 比すべきものであり、樗柳を低いと呼ぶなら、泥土の方は最も低く卑しいものと言わねばならぬだろう。

§ 196

「生まれも、受けた教育も最もよい者であれば、誰でも」(なおこれは、

実践的美的主体の人格である、§ 45、54、63)「卑しきこと、低きことを何ら考えない」(キケロー『善と悪の極限について』V.57)。彼らは誰も

「卑しい話しぶりをして、あやしげな小屋に出入りせぬようにせよ」⁽¹⁾。

「なぜなら、馬と父祖と財産とを持つ者らが不快感をおぼえるから」⁽²⁾
(ホラーティウス)。

私がこれに関係づけるのは、§ 184、192で言及した最も醜い卑しさだけではない。

「もしうまく……したり、懐み深く舌が公言することはできぬようなことを何か友人がしたりすると、それを賞めそやす用意をしている」⁽³⁾(ユウェナリス)

卑屈な諂い、そして、従軍商人、従軍奴隷の間で罵詈雑言を以てなされる派手な悪口も私はこれに関係づける。この種の悪口をかつて何人かの批評家は——何たるお人よしか！ 何たる批評家か！——自己の豊かさと富との記録にしようとした (§ 195)。

(1) ホラーティウス『詩学』229。

(2) 同 上 248。

(3) ユウェナリス III.106—107 を多少変えてある。

§ 197

大きなものと小さなもの、「重さのないものと重さを持つもの」⁽¹⁾ (§ 177)、品位のあるものとないもの (§ 182)、正しいものと正しからざるもの (§ 196) を軽率に混同せぬよう、素材の絶対的大きさと品位を判別せねばならぬが、その際に美しく思惟されるべき素材から除かれていないものとして、次の7つがある。1) いくらかの美を、そして時には最高の美を持っているもの (§ 178)。ところが或る人々、いわば巨人族の兄弟⁽²⁾は、

自己のみを大きいものと考え、自分だけが讃嘆する巨大な尺度に全てを関係づける。そこで、彼らの認めうるのは、誰もなしえぬもの、低くしか評価されないもの、単なる些事のみなのである。宗教ですら多くの人にとって

「実質を伴わないなら、藻屑である」⁽³⁾

以上、「エパメイノンダースの音楽」⁽⁴⁾を引用するまでもあるまい。

(1) オウィディウス『転身譜』I.20。

(2) 巨人族の兄弟]

巨人族は大地の子で、親が不明の子をそのように呼ぶ。ユウェナリス

IV. 98参照。

(3) ホラーティウス『諷刺詩』II.5.8。

(4) ネポース pr.1。なお§ 201参照。

§ 198

2) 或る種の相対的、比較的な大きさは確かに欠けているが、絶対的の大きさ (§ 178) は欠けていないもの。例えば、会話や親しい者同士の書簡に含まれているものであり、この場合には、われわれはたった2人でも「互いに十分大きな劇場である」(セネカ) こともある。コリュドンはそのような者として現われる：

「アレクシスよ、私は君にみくだされている。私が誰であり、白い羊をどんなに沢山持っており、どんなに乳に溢れているかを君は尋ねない。千匹の私の羊がシケリアの山々を歩き回っている」⁽¹⁾ (ウィルギリウス『牧羊詩』II.19)。

(1) ウェルギリウス『詩選』II.19—21。

§ 199

3) 不純な心ならば、その素材自体とその様々の要素、帰結において、徳に敵対するものをも少なからず考え出すことがたとえでできるにしても、純粋な心ならば、それ自体としても、またその様々な要素と十分多くの帰結とともにでも、豊かに、生き生きと、そしてその他 § 22 で述べたような仕方では思惟することができるもの。例えば次のものがそれである。

「ティーテュルスよ、君はのんびりと木かげで、姿よいアマリュリスのこだまを返すことを森に教えている。」⁽¹⁾

4) 他の人々によって思惟されるときには気に障らないが、気難しい徳や見せかけの徳には不快をもたらすもの。こういうものは嫉妬によるという疑いをもたれる。例えばマルティアーリス IX.98の

「私は愛されているし、認められてもいるので」 (§ 200)
がそれである。

(1) ウェルギリウス『詩選』 I.1.4—5。

§ 200

5) 全ての人と年代、時と所に調和するわけではないが、健康な大きさと品位を十分具えた人 (§ 197) には調和するもの。

「スキーピオの勇敢さとラエリウスの円熟した知恵が公衆から隠遁してからは」、ルーキウスと「ふざけあい」 (§ 192)、くつろぎ、「野菜が料理されるまで気楽に戯れるのが常であった」⁽¹⁾ (ホラーティウス『談論集』 II.1.75)

のが、その例である。6) 明白に、或いは直接に、或いはより密接に徳を印象づけるわけではないもの。例えばルクレーティウス I.49がそうで

ある：

「天と神々の最高の理性について論じよう。そして、ものの始原を開示しよう。この始原から自然は全てのものを生み出し、育て養うのである。そして自然はまた、死滅したものを再びその始原へと解体する」⁽²⁾。

(1) ホラーティウス『諷刺詩』II.1.71—74。

(2) ルクレティウス I.54—57。

§ 201

7) 或る種の相対的、比較的品位は欠けているが、絶対的品位 (§ 188) は欠けていないもの。例えば次のものがそれである：「エパメイノンダースは、正しく舞い、巧みに笛に合わせて歌った」⁽¹⁾ (コルネーリウス)。加えてアナクレオンと、有名なカトゥルスの雀がある。カトゥルスは第2歌で生きている雀を、第3歌で死んだ雀を歌っている：

「嘆くがよい、ウェヌスたちよ、クピードーたちよ、そして、美を識る全ての者たちよ。私の恋人の雀は死んだ。私の恋人のお気に入りの雀は……」⁽²⁾。

(1) ネポース pr.1。

(2) カトゥルス III.1—4。

第17節 素材の相対的大きさ

§ 202

絶対的大きさと品位とが適合する素材 (§ 182、185) は、それがどんな

相対的大きさと品位を持つかによって3種に分かれる。I. 相対的大きさと品位を最も少なく持つのは、植物では檉柳に喩えられるものである。美的主体に相応しい一定の広さは持っているが、かなり小さい誉れに値するものである。これを**簡素な素材**と呼ぶ。人格、人格的对象もこれに属することをあなたが疑わぬよう、われわれもデメトリウス⁽¹⁾にならって述べよう。

「名をウォルテーイユス・メーナ、呼び込み屋で、財は乏しいが前科はなく、然るべきときに働き、また休み、稼いでは使い、名もない仲間と、ぼろ家と、祭りと、仕事を終えたあとのカンブス・マルティウスを楽しんでいる」⁽²⁾ (ホラーティウス『書簡詩』I.7.55)。

(1) デメトリウス] Demetrius

次に引用されたホラーティウスの詩の中で、メーナについて報告する奴隷。

(2) ホラーティウス『諷刺詩』I.7.55—59。

§ 203

II. 最も大きな相対的大きさと品位とを持つのは、植物では森に喩えられるものである。やはり美的主体に相応しい広さを持っていて、最も大きな誉れに値するものである。これを、すぐれて**大きく、壮大で、崇高な素材**と呼ぼう。セネカが、物事に内的に具わる大きさと品位とを審査しつつ、「これらの悪徳（奢侈、食欲、情欲、野心）全てがどれほど進展、拡大するかは問題ではない。それらは狭く、惨めで、卑しいものである (§ 195)。ひとり徳のみが高く、(道徳的にも) 卓越している。そして」最後の言葉に至るまで「同時に穏和であるもののみが偉大である」⁽¹⁾と言うとき (『怒りについて』I.16)、私は反対せぬであろう。しかし、われわれのみとところ、この話の関わる対象的大きさ、品位は、対象自体に内属するもので

なく、対象に内属するものが何であるにせよ、その対象について大きく、品位ある思惟を形成しうのような、かなり近い原因を含んでいるものである (§ 189、18)。

(1) セネカ『怒りについて』 I. 21. 4。

§ 204

正しい持前のうちには、卑しくも低くもないが、簡素 (§ 202) でありうるものがある。それは、1) 或る種の、相対的に大きな自然的大きさを持たないものの場合とか、2) 道徳的ではあるが、理性類似者によって観察されうる (§ 181、182) 多くの要素、帰結に与らぬものの場合である。これと同様に、悪しき持前、悪事のうちには、美しく思惟しようとする者の目に大きな素材、否、壮大な素材とも見えるようなものがある。それは、1) かかる持前、悪事の諸要素及び質料の点で、遠く又は近く連関する現実的なもの (M. § 914)、及びその形相自体がかなり多数の帰結を介して自然的大きさを持つもの、更には、質料的悪又は形相的悪から流れ出てくることが理性類似者自体によって開示されるべきものの場合、及び2) 論述対象の形相でなく、その大きな醜さが、美的に思念しようとする人によって眼前に据えられるべき主題として選ばれる場合である。2) は確かに、最も品位を以てなされうることである (§ 18、203)。カティリーナの犯罪がキケローとサッルスティウスには壮大な主題であったと思われたのはこの理由による (§ 89)。またペトロニウスは、

「巨大なデーモステネースの武器をふるい、剛胆なキケローの壮大な言葉を吐く」⁽¹⁾

よう助言しているが、それもこの種の主題においてでなければ容易でない。

(1) ペトロニウス 5。

§ 205

道徳的には中立であるが、もし品位のうちに据えられるならば、自然的
大きさだけは、相対的に最も大きなものを持っているものも、美的に壮大
な対象 (§ 203) から私はしめ出すつもりはない。かかる大きさは、確か
に消極的なもの (§ 193) にすぎないが、それにもかかわらず最高の注意
深さを以て保護するようにせよ (§ 203)。ルクレーティウス I.720がシ
ケリアについて語る壮大なことがそれである：

「ここに大きなカリュブデースの唸りがあり、ここでアイトナの炎の唸
りは」⁽¹⁾。

しかし彼が次のように続けるときは、十分品位をもっているだろうか：

「再び怒りを集める気配をみせる」⁽²⁾。

私としては、壮大な思惟を持とうとするときには、

「人間の種族には多くの仕方で驚嘆すべき偉大な地方であると思われ
る」⁽³⁾

とだけ言って、

「訪ねるべきと言われている」⁽⁴⁾

などと付け加えたりはしないであろう (『アエネーイス』 III. 571以下参照)。

(1) ルクレーティウス I.722—723。

(2) 同 上 I.723。

(3) 同 上 I.726—727。

(4) 同 上 I.727。

§ 206

しかし、類的に最も大きいものは、最大と言ってよい消極的な自然的大きさ、品位を持つものであるが、或る種の積極的品位 (§ 193) もつけ加わってくるものが、それらから現われることがある。キケロー『神々の本性について』第2巻166をこれに数え入れてもよからう。もしもキケローがそれを本心から書いたと考えてよいならばだが：「偉大なる人が神的靈感なしであることはかつてなかった。167：わが国の人々（ストア派）と、哲学の開祖ソークラテースとが徳の豊かさについて語ったところによれば、偉大な人々にとっては万事が順調に進む。168：本心からそうするにせよ、偽ってそうするにせよ、神々に反対の論を立てるのは、悪しき不信心な習慣である」。

§ 207

クィンティリアーヌスが考える如く (Ⅷ.3)、「立派なもの、崇高なものは人によって異なる」⁽¹⁾が、同様にまた、より簡素なものときさほどでないもの (§ 202) も人によって異なる。ここで簡素さ、崇高さは、悟性と理性のみが、できうる限り判明に表象されたものにおいて開示するものと考えられてはならない (§ 15, 16)。そうではなくて、観察可能な、美しく据えられるべきもののうちの最小のものから最大のものへと、すぐれた理性類似者を介して、品位を伴いつつ少しづつ高まっていく素材の複合体は、その全体を3つの部分に等分せねばならない。一番下層には、美的に簡素な素材があり、一番上層には、美的に崇高な素材がある。このいずれも更に、大きさと品位の諸段階を自己のうちに含んでいる (§ 203)。

(1) クィンティリアーヌス Ⅷ.3.16。

§ 208

Ⅲ. 素材の第3の種類は、植物では灌木に喩えられるべきもので、簡素なものと崇高なもの (§ 207) の中間部を占める。これを中間的素材と呼ぼう。それは「介在的、中間的であり、いわば中庸を得たものであり、」簡素なものと崇高なものに「隣接し、そのいずれにも関わっている。或いはむしろ本当を言えば、いずれにも関わっていない」⁽¹⁾ (キケロー)。これの例は、テレンティウス『アンドロスから来た娘』I.1における、パンピルスの描写である：

「大方の若者が皆していることだが、馬や獵犬を育てたり、哲学者のところに行くなど、何か或ることに携るけれども、決してこれら1つに特に熱中することなく、全てを程々にやっている」⁽²⁾。

(1) キケロー『弁論家』20。

(2) テレンティウス『アンドロスから来た娘』I.55—59。

§ 209

ロンギーノスが「何ら偉大なものはなく、それを見下すことこそが偉大である」⁽¹⁾ (第7章) と言うとき、大きなもの (§ 177) ——それはたとえ相対的に大きいものであってもよい (§ 203) ——と、かかる大きなもののうちで最大のものとを混同しているように思われる。彼はその例として、諸々の名誉、品位、及び「外的装飾を多く持っているもの」一般を挙げている。そしてその理由をこう説明している——それらは賢人には際立つ善とは思われず、それらを軽蔑することが黄金の中庸であり、それらを享受している人々よりも、それらを持てるのに軽蔑している人々の方をわれわれは一層讃嘆するのである (§ 207) ——。更に進んで、すぐれて崇高なる

ものの性格をはっきり示し、「常に、且つ万人に満足されるもの」がそれであるとするとき、果たしてこの大きなものに確実に包摂されうるようなものが何かあるか疑問である。もしあるとするならば、それは確かに大きなものでなく、最大のものであろう。彼が第8章で「激しく、神に憑かれたパトス」⁽²⁾を要求する場合がその例である。§ 203で引用したセネカと比較するがよい。

(1) ロンギーノス VII. 1.

(2) 同 上 VIII. 1.

§ 210

ロンギーノスが第8章で、崇高 (§ 203) をパトス的なものから区別しているのは正しい。なぜなら、いくつかの

「軽い心配は語り、大きな心配は黙す」⁽¹⁾ (セネカ)

からであり、また、感情なしにも崇高はありうるからである。同時にしかしロンギーノスは、必要な場合における激しい情緒ほど壮麗なものは何もないと、確信をもって主張している (§ 206)。第33章以下でロンギーノスは、欠陥を伴う大きさ (つまり相対的崇高のことである § 203) が、あらゆる点で健全で、欠陥を持たぬもの (§ 208) よりすぐれているか、という問題を詳しく論じている。この場合、2つの量——すなわち、(1)付着している短所の総計を差し引いても、なお残っている合計と、(2)その段階の美が除去すべき欠点をたとえ免れているとしても、或る主題について美しく思惟されるべきものの合計が前者(1)の総計以下にとどまるような仕方では思惟された何らかの別の中間的な主題——を比べてみた場合、前者(1)の方が美しいほど、崇高とそれを取り巻くものとが美しいものとして思惟されるべきものであるならば、美的哲学者はロンギーノスのその主張に容易に

同意することになる。中間的なもの (§ 208) においては、短所とみえるのみならず、実際にも短所である多くのものが、それに結びついた崇高を前にしては、短所ですらなく、そう見えるにすぎないということを付け加えておこう。これは、好ましい破格 (§ 25) である。

(1) セネカ『ヒッポリュトス』607。

§ 211

われわれが徳及び良き徳性と見なすのは、現象者となるか、又は、人間の交際、外的生活によって観察される限りでのものである。従って、徳の影そのもの (§ 45) も除外されてはいない。この影と真の徳との区別は、悟性と理性を介してのみ開示されるであろう (§ 15, 16)。それ故、神に対する外的崇拜、習慣、儀式、祭式、慣習、外に示された明敏さ、化粧術、外的状態への配慮、^{フーマーニタース}「礼儀」に属する諸々の義務一般と特に作法——これらは、積極的なものであれ、消極的なものであれ、幸福な生の規則を純粹理性を介してできる限り省察する人が通例理解するのとは幾分か異なった関係を、より重大な倫理学に対して有していること、明らかであろう (E. § 110、……383等)。

§ 212

そして、徳と良き徳性が、人間の自然状態において美的主体によって一般的、且ついわば無際限に直観されることは、必ずしも常にあることではないし、むしろきわめて稀である。そういうことは大抵は、一層精密な倫理学者にしか言えない (E. § 1, 9)。むしろこれら徳と良き徳性が現われてくるのが観られるのは、自然状態の特殊的諸様態 (E. 第2部) におい

てであり、そしてそのみでなく、同時にまた人間の社会状態において、家族と親族、生活の様々の種類、それから多様に相違しあう社会、国家と、市民間の絆による、殆ど無限に豊かな結合においてでもある。しかもこれらの集団は、哲学者が抽象する普遍的なもののばかりでなく、それが身体のあるこの位置に基づき、場所と年代に応じて変わりうるものである限りにおいて (§ 22)、特殊的なもの、いやそれどころか個別的なものであってもよいのである。「全ての人に同じものが立派であったり、醜かったりするわけではなく、古来の習慣によって判断される全ての」⁽¹⁾(コルネリウス)ものにとりわけ注目せねばならない。

(1) ネボース pr. 3。

§ 213

これらの視点から (§ 211、212) 徳と賞讃されるべき徳性とを観想するならば、それらは多くの段階によって互いに異なっているにもかかわらず、或る種の円やかさ (§ 166) を以て3種に分けることができる。それは丁度、過ちや欺瞞の段階が認識しようとする人々に注意深く分けられ、又、殆ど全ての述語が文法学者らに分けられるようなものである。1) 第1の種類は、**単純に立派な生き方**である。これは、良き倫理を持つ生き方の1段階であり、いかなる身分、教育、習慣、運命を持つ人格といえども、その人格が良くあろうとするならば、それを達成するために十分な力を持っていると思われるところの段階である。2) 第2の、**徳性と高貴な生き方**は、§ 211、212の意味で良き倫理をもつ生き方の1段階で、かなり良い素質を持ち、しかも、かなり恵まれた教育を受け、通常の実験ないし或る種の学問を持つ人々のうちのみ通常見出しうるものである。たとえ老齢になっても、必ずしも万人がそれに達しうるものではない、と判断してもあ

まり間違いはなかろう。3) 英雄的徳、及び格別の威厳と結びついた生き方。§ 211、212の意味で把握された最もよく生きる方法であり、これに到達すること、或いは、一層難しいことだが、これを均一に、よい意味で常に同一に保つこと

「ができるのは、好意あるユッピテルが愛し、燃ゆる徳が天へと高めた少数の者、つまり神々の種族のみ」⁽¹⁾
である。

(1) ウェルギリウス『アエネーイス』VI. 129—131。

§ 214

生きることを知る者 (E. § 390) は、§ 213で短く、しかし十分明白に指摘された相違を、自分で一層豊かに思い描くがよい。そうすれば美的品位 (§ 182)、すなわち相対的なもの (§ 185)、及び客観的なもの (§ 189) の次のようないわば尺度を懐胎することに躊躇することはないであろう：単純に立派な生き方：簡素なもの (§ 202)=高貴な生き方：中間的なもの (§ 208)=英雄的な生き方：崇高なもの (§ 203)。

§ 215

人間的事物の境界であるもので、エピクテトスの言うように⁽¹⁾、2つの把手——支え持つことができるものとそうでないもの——を持たぬようなものは殆ど無い。絶対的品位を持つ対象だけでなく、崇高な対象ですら、その或る部分から考察されるならば、同時に別の把手をも持っている。この別の把手を一層しっかりと検査するならば、崇高が消え去るだけでなく、品位全体が消え去ることすら稀ではない。第15、16節と比較すればわかる

ように、自然的大きさもこれと同じあり方をしている。ここからして一層観察しやすいことであるが、対象、素材の中には、一見したところでは常に同一にみえるのに、その様々の位相、様々の要素、契機のうちいずれに最も注目するかに応じて、時には低いもの、ないし少なくとも簡素なものになり、時には中間的なものになるものもあれば、時に中間的なもの、時に崇高になるものもあるであろう。更に対象のうちには、その様々の側面のいずれが観客の目に提示されるかに応じて、相対的大きさと品位の全段階を貫きうるものもある (§ 202, 214)。「或ることが誰によって為されるかによって、どれほど大きな違いがあることか。同一の行為でも、行為者が有名であるか無名であるかによって、きわめて高く持ち上げられたり、きわめて低く貶められたりする。……」⁽²⁾(プリーニウス 6. 書簡24)

(1) エピクテトスの言うように]

エピクテトス『要録』Sec. 43 参照。

(2) 小プリーニウス『書簡集』VI. 24. 1。

§ 216

ウィルギリウスは『牧羊歌』において大方は簡素なものを追い求める。フォスは『詩選』V. 35で、写本を次のように読んでいる：

「実を結ばぬ細麦と不毛な燕麦が生える」⁽¹⁾。

同じウィルギリウスが (§ 215)『農耕歌』では中間的な対象を求め(第1巻154)、次のように思惟している：

「実を結ばぬ細麦と不毛な燕麦が支配する」。

これと比べると、『牧羊歌』の詩行はより小さいように見えるが、それも理由のないことではない。しかし、ブルーデンティウスのように、壮大な『罪の源』を思念しようとする人が墮落の絵に

「実を結ばぬ細麦と不毛な燕麦が生える」
 と書き込み、そのあとになおも続く惨事と荒廃の絵に
 「実を結ばぬ細麦と不毛な燕麦が支配する」
 と書き込み、最後に、当然ではあるがやはり悲しむべき結末の絵に
 「実を結ばぬ細麦と不毛な燕麦が」焼かれる
 と書き込むならば、素材の重さに応じて一層偉大な他の着想の間にあって
 も、これらの思惟は高邁な素材を決して貶めるものではないと私は思う
 (§ 215)。平和の産物もまた簡素、中間、壮大いずれでもありうる。

(1) ウェルギリウス『詩選』V. 37。

第18節 素材と思惟の釣り合い一般

§ 217

自分の人格的及び物的対象に、そして、思惟主体ないしその何らかの状態が同時にまた自分の対象であつたり、それに一致して思惟せねばならぬ (§ 177) 対象であつたりする限りにおいては、思惟主体そのものに、思惟が釣り合い、^{そうおう}相応することを美的大きさは要求する。絶對的に大きな対象や相對的に大きな対象よりも小さい種類の思惟は^{バトス}低さ（卑しい、地を這う種類の思惟）である。自分の対象よりも大きい種類の思惟は膨脹（冷たさ⁽¹⁾、膨脹し、ふくれあがった、高すぎる、高揚しすぎた種類の思惟）である。絶對的に大きな対象に思惟が釣り合っていることは長所であり、その反対の欠点は、欠如においては^{バトス}低さ、過剰においては膨脹である。

(1) 冷たさ] (frigus)

事柄に不相応に脹らませた文体は、古代にもやはり「冷たい」(psychros,

frigidus) と形容された (cf. H. Lausberg, *Handbuch*, § 1076)。

§ 218

かくしてキケローは、「低く卑しい言葉も、あまりに高い、高揚した言葉も認めないが、しかし、聞き手を一層大きな讃嘆に導くために、言葉が重みにみちている (§ 189) ことを望むアリストテレース」(『弁論家』192) に従っている。キケローが『ロスキウス弁護』156⁽¹⁾で述べる如く、低さは品位一般に対立するのであるから、低さは美しい思念から追放されねばならない (§ 195)。しかし、同時に膨脹も追放されねばならない (§ 217)。「手が腫れているとき、それは正しい状態にあるだろうか。また、その他の部分が脹れ上がっているとき、それは具合が悪くないだろうか。同様に、高揚し脹らんでいる精神は悪徳の中にあるのである。これに対し、賢人の精神は常に悪徳を欠き、決して高ぶらず、決して増長しない。」(キケロー『トゥスкулム論議』Ⅲ.19)

(1) 『ロスキウス弁護』156]

『アメリアのロスキウス弁護』136の誤りと思われる。

§ 219

「あなたは名誉欲で脹れ上がっているのか (§ 217)。心淨くして1つの書を3度読めば、あなたを刷新しうのような或るお祓いがある。」⁽¹⁾ (ホラーティウス)

これは、実例によって実践的になされることもあろうし、思惟を物事と呼ぶならば、

「物事には節度があり、一定の限度がある。それを過ぎても、またそ

れに不足しても、正しいものは存在できない」⁽²⁾

ということが真実であることを同時に示すことによって、理論的になされることもあろう。つまり、この神聖この上なき法則を忘れぬ者は、低いものを避けうるだけでなく、同時にまた、胸のうちで自分自身にこう言うことができるであろう：

「それ故、時宜を得ぬ傲りを抑制せよ」⁽³⁾ (オウィディウス『哀歌』)。

(1) ホラーティウス『書簡詩』I. 1. 36—37。

(2) ホラーティウス『諷刺詩』I. 1. 106—107。

(3) オウィディウス『哀歌』V. 6. 45。

§ 220

「われわれ詩人の大部分は、正しいものであるという外観によって欺かれる。壮大なものを約束した者は、大げさなものになる。あまりに慎重で、嵐を恐れる者は、地面を這い回る」(ホラーティウス)。

「いつも無理して広い海に進むこともなく、また、注意深く嵐を恐れつつ、危険な岸辺にあまり接近しすぎぬならば、一層正しい」⁽²⁾ 航路を君はとることになるであろう (§ 217)。

というのも、その場合には、自然的なあり方の思惟を追求することになるからである (§ 104)。なぜなら、

「私が思うに、確かにわれわれは皆、状況の移りかわりに応じて、大きくなったり、しぼんだりする (§ 195) というのが本当のところである」⁽³⁾ (テレンティウス『義母』III. 3)

からである。

(1) ホラーティウス『詩学』24—28。

- (2) ホラーティウス『歌章』Ⅱ.10.1—40。
 (3) テレンティウス『義母』Ⅲ.3.379—380。

§ 221

従って、避けるべきものが2つある。Ⅰ. 詰まらない(些細な)あり方の思惟。これは、本当にそのような些事についてたわ言を言う者、つまり対象に釣り合った思惟を形成、提示する者の持つ思惟のあり方である。つまり、この思惟のあり方は絶対的に大きなものよりも小さく (§ 178)、対象に釣り合っているという点では正しいものである (§ 177)。かくして低さの第1の種が構成される。

「実際、些事を放擲して、知恵を持ち、子供の年齢向きの遊びは子供に譲るがよい。」⁽¹⁾

つまり、プラウトゥスのたわ言を多く語る者⁽²⁾ででもない限り、このような結婚菓子の中に月桂樹の枝を捜し求める⁽³⁾ことのないように。

- (1) ホラーティウス『書簡詩』Ⅱ.2.141—142。
 (2) プラウトゥス『ペルシア人』703。
 (3) 結婚菓子のうちに月桂樹の枝を捜し求める]

些事に名誉を求めることを意味する。出典はキケローの『アッティクス宛書簡』Ⅴ.20.4。

§ 222

Ⅱ. 本当にそのような些事について、それがかなりのものであるかのよう (§ 177, 178) 扱う思惟のあり方。これは、膨張の第1の類 (§ 217) である。これは更に3種に分かれる。第1種は、たとえ簡素なもの (§ 202) であっても、絶対的に大きなものに不幸にも些事を据える場合。第

2種は、些事を中間的なものの間に挿もうと試みる場合。そして最大の種は、まるでそれが壮大、崇高なものであるかのように些事について思惟する場合である (§ 203)。

「きわめて大きな物語が無から生ずる」⁽¹⁾

のは常に滑稽である。しかし特に滑稽なのは、次のような場合である。

「私の裁判は、暴行でも、殺人でも、毒でもなく、3頭の山羊についてのもです。それが隣人の盗みによってなくなったと私は訴えているのです。判事はそれを立証するように要求しています。ところがあなたは大声をあげ、腕を提り回して、「カンネー」とか、「ミトリダテス戦争」とか、「ポエニ人の狂気の偽誓」とか、「スラ」、「マリウス」、「ムキウス」とか叫んでおられます。ポストゥムスさん、そろそろ3頭の山羊について話して下さい。」(マルティアーリス VI. 19)

(1) プロペルティウス『エレゲーイア詩集』II. 1. 16。

§ 223

しかしながら、われわれが単なる法則を恐れる者、書くことを抑制する者であると思われぬよう、積極的に勧めるのは、少なくとも絶対的には大きな素材に匹敵し、釣り合った**あり方の思惟**を実行することである。このあり方の思惟を、少なくとも絶対的には**十分に大きい**、そして筋に寄与し、それにぴったり合っていると云っても、**真実**にかなっているであろう (§ 177、217)。ところで、それは同時にまた少なくとも絶対的、消極的には**十分品位あるあり方の思惟**でもあるだろうし (§ 182、185、193)、また、それ自身の素材の相対的大きさと品位に十分適合したものでもあるだろう (§ 162)。

§ 224

更にこのことからして、あまり品位のないあり方の思惟が、絶対的若しくは相対的に品位のある対象、表材に不釣り合いな欠陥の故に斥けられる。これは、自己の属する低さの類の中でも、醜さの点で常に目立つ種である (§ 217, 182)。この思惟のあり方による様々の種において次に注目すべきは、卑しいものについての下劣なあり方の思惟である。これは、自己のきわめて低い対象に釣り合い、匹敵するもので、低さの第1の類の中でもかなり醜い種 (§ 221) である。例えばホラーティウス『書簡詩』8、『談論集』I. 8、カトゥルス15、16がそれである。

§ 225

また、本当につまらぬもの、否、卑しい、きわめて低いものであるのに、何らかの品位（絶対的なものだけでなく、相対的なものも含めて）を、そしてひょっとするといささかの威厳をも、もし神嘉し給えばそれにこすりつけようとする場合、それは膨脹の第1の類のうちに座を占めうるが、この種もここでやはり斥けねばならない (§ 222)。例えば、小さなトリマルキオー⁽¹⁾とかいう者の客が肉汁をなめ⁽²⁾、この男がそれに因んで名づけられた夜が明けると、

もう「力の弱い者の長い首を、アンタイオスを地面から高く持ち上げて
いるヘルクレースの首になぞらえる」⁽³⁾

場合がそれである。

(1) トリマルキオー] Trimalcio

ペトロニウスの『サテュリコン』の登場人物。成金で、自邸に客を招いて宴を催す。

(2) 小さなトリマルキオーとかいう者の客が肉汁をなめ]

ホラーティウス『諷刺詩』I.3.81; ペトロニウス 36参照。

- (3) ユウェナーリス III.88—89。なお、ヘルクレースは、雄牛のように強い首を持つことで名高い。

§ 226

広義の道徳的あり方の思惟と言われるのは、エートス (§ 193) 全体にしっかりと注目しているものである。かくして、ホラーティウスの『詩学』319

「はなやかな箇所を持ち、正しい性格づけはなされているが、優美さは持たぬ物語は、重さと技術がなくとも、内容のない詩句や、響きがいだけのたわ言よりも強く人々を魅了し、ひきとめることも時々ある」⁽¹⁾への註として、既にアークロン⁽²⁾は、「正しい性格づけのなされた物語」とは、「個々の人物の性格が最もよく表現されている」ものであるとしている。さて、全てのエートスの大部分は、美しく思惟される際、先ず真実らしさ、次に説得性、最後に生命のために要請される。確かに、それを学の自然的方法で展開することはできない。また、この意味の道徳的あり方の思惟を汲み尽くすことは許されないし、網といわば規則を立てることによって生じてくるものとを介してしか要求することは許されない (§ 22)。

(1) ホラーティウス『詩学』319—322。

(2) アークロン] Helenius Acron

後2世紀の註釈家。ホラーティウス、テレンティウスらの註釈を書いたが、現存しない。今日彼の名のもとに伝えられるホラーティウスの註釈は、彼の影響を受けた別人の手によるものである。

§ 227

狭義の道徳的あり方の思惟と言われるのは、少なくとも絶対的品位を、そして時には相対的品位をも持つ素材と対象に常に釣り合い、且つ、釣り合いよく思惟する均一なあり方を保持し、それ故、思惟主体の性格について好意的な予断を観客からいわば絞りとるものである。クィーンティリアーヌスはこの点でキケローに従うと述べ、「道徳的な陳述部」を要求しつつ、「しかし弁論においては、全ての部分が、できる限り品位を伴う道徳的なものでなければならない」⁽¹⁾ (IV. 2) と付け加えている。そして、これは既にあの道徳的なあり方の思惟——つまり、ここで先行諸条件によって許されるというだけでなく、もし真に美しい思惟内容を熱望するならば、要求せざるをもえないもの (§ 182, 185) ——である。

(1) クィーンティリアーヌス IV. 2. 64。

§ 228

狭義での、よい道徳的なあり方をした思惟は、更に絶対的にそうであるものと、比較的、相対的にもそうであるもの (§ 227, 185)、消極的にのみそうであるものと、積極的にもそうであるもの (§ 193, 194) とに分かれるだろう。醜く選択された、下劣で、最も低い素材にたとえそれが釣り合っているとはいえ (§ 224)、狭義の、但し絶対的に悪しき道徳的あり方の思惟、又は不敬な、又は恥知らずの、又は見苦しいあり方の思惟を斥けるには、美の形相そのもの (§ 183) から引き出された論証だけで目下のところは十分であろう。

「きわめて気前のよいロツリウスよ、もし私の見方に誤りがなければ、君は友人だと公言したのだから、寄食者の外観を呈するのは嫌でしょう。

丁度主婦が娼婦と異なり、身なりも違うように、友人は、信義を知らぬ寄食者と異なっているものです。」⁽¹⁾ (ホラーティウス『書簡詩』 I. 18)

(1) ホラーティウス『書簡詩』 I. 18. 1—4。

§ 229

狭義と呼ばれた (§ 227) この、よい道徳的なあり方の思惟を、私は広義の道徳的あり方の思惟から丁寧に区別した。それは、真実らしさへの、そして諸性格を一層実り豊かに表示しようとする事への熱心さ自体の故に——言い換えれば、道徳的なあり方の思惟のうちの或る部分を追い求めるうちに——、品位が要請する (§ 227) もう1つの部分を麗しき天性が見失ってしまうというはめに落ち込むのに、私はしばしば気づいたからである。尚、ここでいう品位とは、絶対的なもの (§ 228)、言い換えれば、この2つの完全性の衝突を避けない場合に、悪くない例外を真実らしきの要件そのものから勧告するところの品位である。ユウェナーリスの卑しさや、他の多くの諷刺詩人の放埒はここに由来する。

第19節 簡素なあり方の思惟

§ 230

思惟が自己の対象の相対的(第17節)大きさにも相似的であることが、美的大きさには重要である。ここから、3種の思惟のあり方が生まれる。それらは、いずれも2種の逸^{バレーバシス}脱を伴っている。言葉においてのみこの3種を認める人々は、かつてそれを言葉の3種の性格とか、型とか、形とか、更には姿とも呼んだ。

「3種の語り方がある——崇高なもの、節度あるもの、そして細い糸で緻密に織られたもの。」⁽¹⁾ (アウソーニウス)

(1) アウソーニウス『3という数の謎々』67。

§ 231

I. 簡素なあり方の思惟（繊細な、細い、控え目の、細身の、アッティカ風の、枯れたあり方の思惟^{イスクノン}）とは、絶対的品位を十分に固持し (§ 223)、且つ相対的にも狭義の進徳性を持ちつつも、単純に立派な生き方と単に矛盾しないのみならず (§ 213)、§ 211、212で判別されたその諸性格と正しく調和する (§ 214) という仕方、で、簡素な (§ 202) 素材と釣り合っている (§ 230) ものである。この簡素なあり方の思惟を、ずっと昔、すでにテレンティウスの時代に、欠点矯正者に選ばれた「老詩人」⁽¹⁾が攻撃している：

「言葉が細く、書法が軽いのは」欠点である。「なぜなら、『牝鹿が逃げ、犬が追いかけ、牝鹿が助けてくれるように泣き叫ぶのを、狂気の若者が見る』と彼は書いていないから。」⁽²⁾

(1) 欠点矯正者に選ばれた「老詩人」]

ラーウィーニウス・ルスキウスのこと。テレンティウスの先輩にあたる喜劇作家で、テレンティウスは自らの劇のいくつかの前口上でこの人から受けた攻撃に言及している。続く引用部分もその1つで、『牝鹿が……』の部分、この人の作品中にある言葉であろう。

(2) テレンティウス『ボルミオー』 prol. 5—8。